

DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止

聖星天使

Vol. 1

スターガールズ

プロローグ

この地球のどこか、闇に支配された世界の奥深く。邪悪な力が充滿する空間に悪の組織のアジトが根を張っていた。

大きな玉座に腰を下ろす闇の女王がシモベの帰還を待っていると何もない空間から歪みが生じ、等身大サイズの紫色のゲートが出現する。そこから黒いスーツを身に纏った青髪の少女が一人、ゲートを通ってアジトに戻って来る。さらに彼女に続いて全身黒づくめの少女たちが続々と出て来た。

「ヴァンドレディ様！ スレイブブルー、ただいま帰還致しました！」

元氣よく主人に報告する青き戦闘員。

そして、その後ろにいる兵士たちを見て組織の主は愉悅の笑みをこぼす。

「ご苦労様、その様子だとたくさん洗脳してきただようね」

「はい。学園にいる者は誰もわたくしに對する警戒心がないので洗脳が簡単でした」

「うふふ、お友達を裏切って罪悪感はないのかしら？」

「ありません。ご主人様のために働くのにそのようなモノは不要です。それにこの子たちもヴァンドレディ様のシモベになれるのですから、むしろ幸福感に包まれていますわ」

学友の悲鳴が喘ぎ声に変わる瞬間、邪悪な力に飲み込まれ悪の尖兵に生まれ変わっていった様を思い出し青い戦闘員は頬を緩ませる。

彼女らに自らの裏切りを露見させた時のゾクゾク感が病みつきになりそうで次の任務が待ち遠しかった。

「洗脳が馴染んで悪の心が身に沁みついていたようね」

「身も心もわたくしのすべてがヴァンドレディ様のものです。ご主人様の忠実なるシモベに何なりとお申し付けください」

かしこまって頭を下げる戦闘員にヴァンドレディは顔を上げるように言う。

「優秀なシモベにはご褒美を上げないとね。こっちへ来なさい」

「ご褒美……！ ありがたき幸せ……♡」

玉座の前に戦闘員がスタンバイするとヴァンドレディが立ち上がり彼女を後ろからハグをする。背中に伝わる巨乳の弾力。戦闘員が首を後

ろに捻ると一頭身分の身長差から主に見下ろされていた。

黒いバイザー越しに見つめ合う悪の主従。

ヴァンドレディが抱いたシモベの肉体は褒美という単語だけで興奮しすでに火照っていた。

「舌を出しなさい」

「かしこまりました、れろお……♡」

唇を重ね二人は舌を絡め唾液の交換をする。

抱きしめられた肉体の周りに漂う高濃度のフェロモン。大好きな主の香りが呼吸する度に鼻に入り幸せな気持ちになる。

（いい匂い……♡ ヴァンドレディ様がお傍にいるから安心しますわ……♡）

キスをしながら胸をぐにゅぐにゅと揉まれる青き戦闘員。主に調教された爆乳がヴァンドレディの手の中で揺れる。

乱雑に握られたかと思えば優しく揉まれ、緩急をつけた弄りに気持ちよくなった彼女は口端から唾液のカクテルをこぼした。

「ふああああ……♡ ご主人様……♡」

「んふふつ、私にすべてを委ねて気持ちよくなりなさい」

唇を離すと二人の間に銀色の糸が伸びる。

主に包み込まれ彼女に洗脳された脳が快楽の波に飲み込まれそうだった。

ぬるま湯に浸かるような永遠の心地良さが脳内麻薬を分泌。戦闘員は浮遊感で体から力が抜け、その身を主に預けてしまう。

前戯が終わり、ヴァンドレディが戦闘員の股間に指を添える。するとその部分の黒いスーツが溶け始め濡れた秘部が露出した。

「もうおマンコ濡らしちゃって……とんだ変態ね♡」

「はい……♡ わたくしはヴァンドレディ様と接吻するだけで発情する変態の牝ですわぁ……♡」

それを認めるだけで興奮が高まり、ところ……と愛液が垂れ主の指に絡みつく。牝のシモベの秘部を軽く撫でると戦闘員はそれだけで体を震わせた。

「あぁん……ッ♡ ヴァンドレディ様ぁ……♡」

「こうされると気持ちいいでしょう？ あなたの気持ち良さそうところ、もっと私に見せなさい」

「はひい……♡」

秘部に指を入れくちゅくちゅと卑猥な音を立

てる。柔らかい蜜壺をほぐし女の弱いところを刺激してやると牝は悦んで喘いだ。

「んおおおおっ……♡ い、イクぅ……！」

「ちよつと触っただけなのにもうイっちゃうのね？ いいわ、我慢せず果てなさい♡」

「ひぐぅ……ッ♡ ご主人様の手マンでイクぅううう……ッ♡ んぁぁぁぁ……ッ♡♡♡」

二本の指でクリトリスを挟まれオーガズムに達する戦闘員。あられもない姿を晒して牝汁を噴出させると彼女はガクガクと両足を揺らす。スルリと主のホールドから抜け落ち、力尽きた彼女はその場にへたり込んだ。

「ご褒美の時間は終わりよ。今度は私にご奉仕しなさい」

「はぁ……はぁ……♡ ふごお……っ!?」

絶頂して疲弊した戦闘員に休む間を与えず、

ヴァンドレディはハイヒールを脱いで彼女の顔に足乗つける。びっちり太腿に張り付く黒タイツに踏まれると濃厚な足の匂いが彼女の鼻を刺し牝穴から蜜汁を漏らさせる。

グリグリと足裏を押し付けられ人としての尊厳を文字通り踏みにじられているというのに、

戦闘員は嬉しそうに頬を淫らに歪めた。

(ヴァンドレディ様に踏まれるなんて光栄ですわぁ……♡ わたくしはあなたの忠実なシモベ、如何様にもお使いください……♡)

彼女は生まれた時から悪のシモベだったわけではない。ほんの数日前まで主と敵対していた正義のヒロイン。それが今はこうして黒くめの戦闘員としてヴァンドレディに仕えている。

主が足を退けると彼女はヴァンドレディの足にしがみつき、肉付きのいい太腿に頬をスリスリした。

「愛していますわ、ヴァンドレディ様ぁ……♡」

「うふふ、あなたはもう私なしでは生きられない……永遠に私の傍で働かせてあげるわ」

「お任せください……♡ 偉大なるわたくしのご主人様のためなら何でも致しますわぁ……♡」

邪悪な力を持った女王に忠誠を誓う元正義のヒロイン。悪の組織に洗脳され身も心も悪のシモベに堕ちた彼女が仲間を裏切るようになるまで一体何があったのか。

これは墮落と快楽の物語。正義のヒロインの敗北から始まる淫らな数日間を描いた物語である。

第一話 登場、スターガールズ

秋風が身にしみるハロウィンの夜、祭りが終わった後も街は賑わいを見せていた。

時刻は九時を過ぎ、オバケの仮装をした親子や学生たちが行列を作って帰路に就く。そんな中人波を外れて裏道に吸い込まれていく制服姿の少女が一人。

遠くに聞こえる騒ぎ声が嘘のように路地裏は静かで少女の足音だけが反響する。

薄暗い道の先には何があるのだろうか、彼女は一夜限りの冒険を期待し当てもなく足を動かして続ける。

どこに繋がっているのか見当もつかない裏道を歩きかれこれ十数分、少女はようやくちょっとした好奇心から出た行動が自分を迷子にさせていたことに気づいた。

「あ、あれ……？　ここ、どこだろう……？」

周囲を見渡すと一面壁、壁、壁……。

振り返って来た道を戻ろうにも同じ風景が連続したせいで自分がどの角を曲がったのかわからなかった。

ナビを頼ろうとケータイの電源をオンにする

も昨夜充電し忘れてしまったせいでバッテリーがほとんど残っていない。

冷たい風が吹き通る路地裏でどうしたものかと立ち止まっていると彼女は背後から声をかけられた。

「その生徒！　あなたよ、あなた！」

「……っ！　は、はいっ……！」

人通りの少ない裏道で声をかけられた彼女は肩を強張らせゆっくりと声のした方を振り向く彼女を呼び止めたのは肌色のコートを羽織った若い女性だった。

「その制服、ウチの学園の生徒ね。一年生のようだけど、あなた名前は？　クラスは何組？」

「えーっと……B組の一之瀬です」

初対面の相手だがその口ぶりから女性が見回りの先生だと察し少女は素直に質問に答える。

それを聞いた女教師はコートのポケットからメモ帳を取り出し生徒のクラスを記す。

そして観察するように彼女をじっと見ると一瞬目を細めた後、指導の続きを口にした。

「下校時刻はとくに過ぎてるわよ。校則はちゃんと守りなさい」

「ごめんなさい、実は道に迷っちゃいました……」

……

「まったく……もう子供じゃないんだから、しっかりしなさい。先生が近くの出口まで案内するからついてきなさい」

「はあ……」

叱られてうなだれながら女子生徒は先生の後ろを歩く。

一方で女教師は彼女を何度もチラ見しながら路地裏をスムーズに進んでいき、この道を通り慣れているのか彼女はものの数分もしない内に生徒を出口に導いた。

「この道を真っ直ぐ行けば通学路に出るわ」

「ありがとうございます！　それにしても、その……ここって……」

闇夜を照らすいくつもの照明。

キラキラと輝く店の看板に目線を奪われそれに注目すると少女は顔を赤くした。

「あわわ……エッチなお店がいっぱい……」

視線を変えてもコスプレ喫茶にメイドバー、キャバクラなどオトナの世界が映るばかり。

ここは自分が来るところではないと少女は目のやり場に困るも、彼女の目はその手の店に興味深そうだった。

彼女の内心を見透かすように女教師は少女の様子を眺め耳打ちする。

「マジメな顔して案外むつりなのね。好きなの？」

「えっ……!? あ、いや……その……何が、ですか？」

「決まってるでしょう？ エッチなことに興味があるんでしょう」

「それは……えっと、ううっ……」

紅潮した頬にさらに赤味が増し少女は顔を伏せる。

興味が無いと言えど嘘だったが、恥ずかしさのあまり本当のことを言えず彼女は口ごもってしまった。

「恥ずかしがることはないわ。そういう年頃だものね。今日のことは誰にも言わないでおくわ」

「あ、ありがとうございます……」

先生のコートにしがみつき彼女の後ろに隠れながら風俗街を練り歩く。

勧誘のお姉さんに声をかけられても少女は首を振るばかりでまともに声を出すことはできなかった。

「これに懲りたら寄り道はしないで、まっすぐ

家に帰ること。この前の集会で風紀委員会も言っていたでしょう？ 最近不審者や学生勧誘が多いから気を付けるように、って……」

女教師が急に立ち止まって振り返ることなく生徒に注意する。少女もそれに返事をしようとするがそれを待たずに先生は言葉を続けた。

「危ないじゃない……夜中に、こんなところで……一人で出歩いてたら……はあ……はあ……」

「せ、先生……？ 大丈夫ですか……？」

背筋を曲げ前のめりになって荒息を立てる女教師。彼女を心配する生徒の話も聞かず、女教師は自分のコートのボタンに手をかけた。

「あなたみたいなのはあはあ……可愛い女の子があ……一人でいるのを見ちゃったらあ……」

コートのボタンを一つずつ外し生徒の方を振り向く。

異様に赤面した先生の顔。頬を釣り上げ口元を歪めた彼女を見て女子生徒は先生の様子が普通ではないと気づくがもう遅い。

「あなたを襲いたくなるじゃないのお……♡」

「きゃああああああああああああっ！」

ボタンをすべて外し女教師はガニ股になってコートの前裾を大きく左右に開く。上着の下に

は緑のランブが付いた黒い首輪が一つあるだけで他に身に纏っているものは何一つなかった。おっぱいの先を硬く立たせ、解放的な表情で女教師は股間から透明な汁をこぼす。

「せ、先生……！ どうしちゃったんですかっ!?!」

「ああッ、自分の生徒にエッチな私を見られてるっ♡ 子供におマンコ見せつけて悦ぶ変態だっ♡ バレちゃったあああああ……♡」

コートを脱ぎ捨て地面に落とすと女教師は手を頭の後ろに組む。欲情した顔を空に向け彼女はドン引きする生徒をよそに高らかに叫んだ。

「あひいひいひい……！ 『あの方』の言う通りに出来て幸せええええ……♡♡♡」

至福の表情で愛液をイキ散らし足元に水溜りを作る。

彼女の叫びに呼応するように緑だったランブが赤色に変わり、黒い靄が女教師の身体を覆い始めた。

肌に触れた黒煙が薄く広がり黒のレオタードとなつて彼女の身体にびっちり張り付く。目元や四肢にも黒い靄が触れるとバイザーやグローブ、ラバー質のブーツに変化した。

「覚醒完了お……♡ キモチイイ……♡」

黒づくめのコスチュームに身を包まれた教師。彼女に驚く女子生徒は身の危険を感じ彼女から逃げようと反対側に向きを変えて走り出す。

しかし彼女の後ろにも脅威が近づいていた。

「な、なんなのあなたたち……!」

変貌した女教師によく似た衣装を身に纏う女の子の集団。先生と違うところといえば目元がバイザーに覆われているのではなく、口周り以外を塞いだ黒いマスクを頭に被せている点だ。

目元のへこみと耳の膨らみからラバーズーツと同じく顔にびっちり密着しているのがわかる。また彼女たちの体格から女子生徒とそれほど年が変わらないように見えた。

そんな少女たちが両手の爪を立て生徒に迫り、彼女の後ろに回って羽交い絞めにした。

「んふふつ、あなたも私たちと同じ先生の『教え子』になりましょう……♡」

「離して! いやあ……!」

女の子とは思えない強い力で締め付けられ覆面の少女たちを引き剥せない。

女子生徒が肩を揺らして抵抗を試みていると一人の女性が彼女の前に姿を現した。

「ごきげんよう、お嬢さん」

白い肌を露出させた肩出しボンデージに長いグローブを身に付け、素顔を仮面で隠した高身長的美女。

紫色の長髪に悪魔の羽らしきヘアアクセを着けた彼女も黒づくめであることから少女は変身した先生や覆面の女子たちと同じであると察知する。

何より黒衣の女の子たちが彼女の登場であからさまに発情しているのが証拠だった。

「あなたは一体……」

「私はヴァンドレディ。その子らの飼主で……そうね、ダークヴァンドのリーダーって言えは伝わるかしら?」

「ダークヴァンド……!?!」

その名前に少女は聞き覚えがあった。

ここ最近噂に聞く悪の組織。

子供から大人まで誰彼構わず誘拐し、手下に洗脳して世界征服を目論む謎の集団。

人伝でしか知らず直接見たことがないため彼女は都市伝説みたいなものかしら思っていないが、いざ実物を目にする噂以上に恐ろしい存在だとわかり全身を震わせた。

「先生がこんな変態さんになったのも私の力のおかげ。可愛い生徒への愛情を歪めて、子供たちとエッチしたいという欲望を植え付けてあげたの。ちなみにその子たちはあなたと同じ学園の生徒よ。そうよね、せんせえ?」

「はいいい……♡ みんなウチの学園の……いえ、私の『教え子』ですううう……♡」

戦闘員になった先生が例のマスクを持って彼らの一員にしようと淫らな笑みを浮かべて女子生徒に近づく。

舌をペロンッと出して少女の前に立った戦闘員は顔マスクの内側に手を入れて広げると彼女の頭に被せる準備をした。

「さあ、あなたもダークヴァンドの一員になりなさい……♡ ヴァンドレディ様のシモベになつて気持ちよくなりましょうねえ♡」

「ひいっ!? 誰か助けてえええええっ……!」

痴女の仲間になりたくない乙女の叫びがこだまする。

彼女の危機に周囲の者たちは助けようとはしない。否、できないのだ。

恐るべき悪の力に力なき人間たちは屈するしかない……彼らがそう思った時、正義の光が夜

の街に差し込んだ。

「お待ちなさい！」

「悪事はそこまでだよ！」

うら若い少女の声が闇夜に二つ。

悪の一味も人間も、誰もが声のする方へ視線を向けて彼女たちの姿を瞳に映す。

しかしそこに少女らの影はなく次の瞬間、天使のごとく地上に舞い降りていた。

「穢れを癒す麗しの青、スターブルー！」

フリルの付いたワンピース型の青白いコスチュームを身に纏うのは髪の高い青き少女。

背中に小さな天使の羽、胸元にはブローチ付きの青いリボン。ムッチリとした太股にフィットしたニーハイブーツをカッソッと鳴らし、少女は白いグローブを嵌めた手を腰に当てる。

綺麗な顔立ちの彼女は艶のある唇を閉じて真っ直ぐ敵を見つめていた。

「闇夜を照らす赤き光、スターレッド！」

そう名乗るのは相方とよく似た赤いコスチュームを着た可愛らしい少女だった。

肩まで伸ばした赤髪に星の髪留めで結んだツースайдアップ。黒いグローブを着けた手で悪

を指差し、力強く彼らに啖呵を切った。

「街の平和を脅かす者は許さない！」

「歪んだ風紀を正して見せますわ！」

「私たち、聖星天使スターガールズっ！」

正義のヒロインの登場に気を取られていた戦闘員のところへハイジャンプ。

青きヒロインが彼らを蹴散らすと同時に赤色のヒロインが少女をお姫様抱っこで救出した。

「大丈夫？ 怪我はない？」

「は、はいっ！ ありがとうございます！」

「ここは危険ですわ。安全なところへお逃げなさい」

ペコリと頭を下げ少女は促されるまま敵のいない方へと走り去って行く。

この場に残ったのは正義のヒロインと悪の一味のみ。二人のヒロインは敵のボス、ヴァンドレイにキッと睨みつけ戦闘態勢に入った。

「懲りもなくまた出ましたわね、ダークヴァンド！」

「ド！」

「今日こそはあなたたちをやっつけてやるんだから！」

「うふふつ、私に傷をつけたいのならまずはこの子たちを倒してからにしないさい。やっちゃいなさい、戦闘員たち！」

主の命令に女戦闘員と彼女の兵士たちが一斉

に走り出す。ヒロインたちは何も言わずアイコ

ンタクトで作戦を伝えたと二手に分かれた。高く飛び上がったスターブルーは兵隊の背後

に回ると何もないところから鋭いレイピアを取り出し剣の先を彼女らに向けた。

「あなた方のお相手はわたくしが致しますわ」

戦闘時であっても優雅な顔を崩さずブルーは敵に余裕を見せる。その態度が癪に障った兵士たちは苛立ちを隠せなかった。

「あの方のお気に入りだからって生意気なのよ！」

「みんな、このデカパイ女を捕まえてご主人様からご褒美をもらおうわよ！」

「「おおっっっ！」」

青いヒロインに飛び掛かる一匹の兵士。彼女に続いて他のシモベたちも一斉にブルーに襲いかかる。

だが、ブルーは彼女たちの隙間に上手く入り、軽くかわしながらレイピアで切り伏せていった。

「他愛もありませんわね。わたくしを捕まえたいのなら鳥籠でも持って出直して来るといいですわ」



「ぐぬぬ……む、無念……」

ガクツと地面に倒れる悪の軍団。彼女らが再起不能になったのを確認するとブルーは剣を光の粒子に変えて手元から消した。

一方、先生だった戦闘員と対峙する赤きヒロインは武器を持たず己の拳だけで戦っていた。

「あなたまで先生に逆らうのお……？ ダメじゃない、先生の言う事を聞かなきゃあ……♡」

指の間にどこから取り出したのかチョークを装填しレッドに投げつける戦闘員。

額目がけて飛んでくるチョークを赤いヒロインが拳でガードすると彼女の視界が碎けたチョークの粉で塞がれてしまった。

「隙あり！ あなたも先生の『クラス』に編入させてあげるわあ……！」

赤や白など色とりどりの煙幕から突如伸びる黒い手がレッドの顔を掴もうと手のひらを大きく開く。

二人の距離はわずか数センチ。敵の指先を認識した時にはミリ単位の攻防になっていた。

それを赤きヒロインは持ち前の反射神経で逸らし、逆に敵の手首を掴んだ。

「そんな小細工効かないよ！ えいっ！」

相手の手を強く引っ張り射程距離に入れ、レッドは彼女の腹に思いっきりパンチし遠くに吹き飛ばした。

「ぎゃあっ！」

煙の中から出て来た戦闘員は空高く宙を舞い兵士らの上に落っこちた。

それでもなお立ち上げる女戦闘員。

しかし、その間に合流していたヒロインたちがフィニッシュを決めようと魔力を込めた手を前に突き出した。

「アクアトルネードっ！」

「フレイムバーストっ！」

ブルーの指先から激しい水流が渦を巻いて戦闘員に向かっていく。その間をレッドの拳から発射された炎の塊が一直線に飛んでいった。

二つの必殺技が徐々に距離を詰め合体すると白い光となって加速し敵の山にぶつかった。

「スターエレメント・エクスプロージョン！」

「「ぎゃああああゝゝゝっ!!」」

合体技が命中し閃光を放ちながら小爆発。

悪の心を焼き尽くす正義の光が戦闘員たちを包み込み、彼女らを支配する邪悪な力を浄化していく。

倒れ伏す戦闘員の黒いスーツが溶け始め乙女たちの裸が露わになると天から降る大粒の雫が役目を終えた赤い力を消火した。

「あら、今日の子は結構上物だったのにこんなあっさりと……なかなかやるわね」

「あとはあなただけですわ！」

「んふふっ、困ったわね。今日のところはこの辺で退散しようかしら」

悪の親玉が空中に紫色のゲートを開きブルーに投げキッスをする。ブルーはそれを汚らわしそうに払いのけ嫌悪感を顔に出した。

「逃がさないよ！」

ヴァンドレディのいたずらに気を取られているブルーの代わりに逃げる敵を追いかけようとするレッド。

ヴァンドレディを捕まえようと彼女が手を伸ばすもその前にゲートが閉じてしまい、そのまま空間の歪みも無くなった。

「また逃げられたあ！」

「仕方ありませんわ。勝てないと見るや逃げるのは彼女の得意技ですもの」

敵に逃げられ悔しがるも彼女らの勝利を街の人々が拍手する。さらにその音を聞いて離れた

ところに避難していた女子生徒が戻って来た。

「遠くでお二人の戦いを見てました！　かつこよかったです！」

二人の顔を交互に見てレッドに握手する女子生徒。

しかしレッドの浮かない顔は晴れなかった。

「ありがとう。でも、一番悪い奴には逃げられちゃった……」

「それでもあなたたちは私の命の恩人です！　本当にありがとうございました！」

「お、大袈裟だよ……！」

「そんなことはありません。私、お二人のファンになっちゃいました！」

「そ、そう？　えへ……」

ファンと言われ悪い気がせず照れくさそうに笑うレッド。そんな彼女の様子をムツとした表情で眺めるブルーは女子生徒からレッドを引き離して撤退するよう耳打ちした。

「この方たちの介抱はお任せしますわ。ダークヴァンドが出たと言えば大方何とかかりますわよ」

大雑把な説明を施しブルーがレッドと共に数歩後ろに下がる。理不尽な嫉妬心を向けられて

いると気づかない女子生徒はブルーを不思議そうに見つめた。

収まらない嫉妬心になるべく顔に出さないようにしながらブルーは人々に手を振る。

「では、みなさんごきげんよう」

「バイバーイ！」

膝を曲げ天に向かってハイジャンプするヒロインたち。

闇夜に消えた彼女らがいた場所に天使の羽が舞い降りる。

「ホントに天使みたい……」

夜の街に歓声と拍手が鳴り響く中、正義のヒロインに惹かれた女子生徒がポツリと呟いた。

☆☆☆

ハロウィン騒動から数日後。

十一月になって最初の放課後、白百合女子学園の空き教室で風紀委員による会議が行われていた。

「最後に先日ハロウィンパーティーについてです。委員長、報告をお願いします」

司会役に促され艶のある黒い長髪の少女が立

ち上がり報告書を読み上げる。

「一昨々日、深夜徘徊している生徒がいらないか見回りしていた先生からそれに該当する生徒が多数見受けられたとの報告を頂きました。補導された生徒らに話を聞いたところ何名かは当日の夜だけでなく……」

綺麗な声で淡々と報告を済ませる委員長。

報告書の内容を最後まで読み終えると彼女は顔を上げ紙に書かれていないことをこの場にいくメンバーに真剣な眼差しと共に伝えた。

「また、あの日の夜には当校の生徒と教職員がダークヴァンドの被害に遭っています。彼らによると皆、近くの歓楽街で襲われているそうです。あの時はスターガールズが駆けつけたので助かりましたが、常に助けが来るとは限りません。ですので、皆さんも当校の生徒に相応しくない場所には近寄らず、気をつけて下校してください」

本日の委員会はこれにてお開きにしたいと思えます、お疲れ様でした。と、締めの一言が終わると同時に学園にチャイムが鳴り響く。風紀委員たちは教室の後片付けをし、各々荷物を持って教室から出て行った。

残ったのは委員長と副委員長の二人だけ。

照明を消した空き教室で彼女らは無言のまま黄昏時を過ごす。

窓辺に立って二階からの景色を眺める委員長と机に突っ伏し暫しの休息を取るショートカットの小柄な少女。

静寂の時が続く中、先に口を開いたのは副委員長だった。

「ああ、疲れたあー！」

椅子に座ったまま背筋を伸ばしストレッチをすると彼女は立ち上がって再度疲れた身体をほぐす。

「私、ああいう堅苦しいの苦手なんだよね。何回やっても慣れないっていうか……」

代替わりして風紀委員会を中心になってから約一ヶ月。

副委員長に選ばれた少女は役職ならではの重責にやや辟易していた。

委員会が嫌になったわけではない。

しかし先代に推薦されたポジションがこうも息の詰まるものとは思わず、いつもの報告会でさえ緊張から肩が凝って仕方がないのだ。

そんな彼女とは対照的に委員長は苦を感じさ

せない爽やかな表情でツツコミを入れる。

「仕方ありませんわ。委員会というのはそういうものですもの。でも、まあ気持ちはわからないくもありませんが……」

コバルトブルーの瞳に映る副委員長を労わる委員長。

だが、それは風紀委員としてだけではなくもう一つの意味を含んでいた。

「連日ダークヴァンドと戦いが続いていましたもの。わたくしも流石に一夜の睡眠だけでは疲れが取れませんわ」

「だよね。今夜は出て来ないといいなあ……」

風紀委員長、君島(きみしま)青子(あおこ)。

副委員長、法(ほう)能(のう)朱音(あかね)。

学園の風紀を守る彼女らだが、その正体は日夜悪の組織から人々を守る正義のヒロイン、スターガールズだった。

二人の出会いはいは三ヶ月前。

ダークヴァンドが現れた日に星の力を与えられたことから法能朱音はスターレッドとして戦い、それから数日遅れて君島青子もスターブルーの力を得たのだ。

青子は君島財閥の令嬢であり、特別であるこ

とにこだわりを持つプライドが高い少女だった。

星の力を得た時も彼女は自分が特別な存在だと信じて疑わず、当初は同じ力を持つレッドをライバル視していたのだ。

星の戦士は一人で十分。ましてや庶民感漂うちびっ子にこんな大役務まるわけがなく自分の足手まといになるだけだとレッドを邪険に扱うほどだった。

しかし、強敵が現れた際の共闘をキッカケに青子は赤き戦士を認めるようになり自然と彼女とコンビを組むようになった。

後にお互いの正体を知った二人は親友と呼べるほど仲睦まじくなり、特に青子は恋心を抱くほど朱音に惹かれていた。

青子の告白を受け彼女の想いを朱音は受け入れ、今の二人の関係が築かれたのである。

「もうすぐ一ヶ月ですわね……」

「……うん、そうだね……」

お互いちらりと相手の様子を伺い、また視線を戻す。

恋人になって明後日で一ヶ月。親友の頃とあまり変わらない日々を過ごしていた彼女たちだが、二人だけの時間が愛おしく感じるようになって

った。

富豪の娘と庶民の子供、身分の違いなどともせず二人は恋仲であることを学園で公言している。

面識のない下級生が週末に彼女らがデートすることを知っているほどだった。

「朱音……」

「どうしたの、青子？」

後ろから青子にハグされる朱音。

背中に感じる大きな胸の弾力も今では慣れたものだ。

「朱音の身体、暖かいですわ。こうしていると心が落ち着きますの……」

恋人の温もりが服越しに伝わり、戦いに疲れた乙女の心が癒される。ぎゅっと少女を抱きしめると女の子特有の甘い香りが鼻の周りに漂った。

（朱音の匂い……ずっと嗅いでいたいですわ……♡）

子供っぽい体に秘められた誰よりも強い勇氣と優しさ。法能朱音という少女に惹かれていたのは彼女の可愛らしさだけでなく、その勇敢さが大きかった。

強敵の一撃から身を挺して自分を守ってくれた小さな戦士。あの時見た彼女の背中が頭から離れない。

その背中を自分が守ってあげたいと思えるようになるのにそう時間はかからなかった。

「愛していますわ、朱音……」

「私も……青子のこと大好きだよ」

☆☆☆

青子と朱音、二人つきりになってしばらくの時が過ぎ去った。

「そろそろ下校時間だよ。今日はもう帰ろう」

「そうですわね。でもその前に……」

ハグをしたまま青子は恋人のうなじに唇を乗せる。

優しいキスで想い人に愛を伝えた青子はそれだけに飽き足らずペロリと白い素肌を舐めた。

「んひゃあっ!? な、何するの!」

「ごめんなさい、美味しそうでつい……♡」

「何が美味しそうなのよ……」

首の横を通るムチとした二の腕がスルリと後ろに抜ける。

ちょっぴりエッチな恋人から解放された朱音が呆れながら彼女の方を振り向くと青子は唇を前に出して朱音からのアプローチを求めてきた。

「学園じゃそういうことやらないって言ったでしょ? 誰かに見られるかもしれないし……」

「わたくしたちの関係はみんな知っていますわ。今さら隠す必要はありませんわよ。ほら、わたくしにもキスをくださいまし」

「まったく、もう……青子のエッチ……」

恋人の手を取って朱音は彼女をカーテン裏に連れていく。窓を覗き外に誰もいないことを確認すると朱音は背伸びをして青子の唇に自分のを重ね合わせた。

「……これでいい?」

踵を床に下ろし相手の顔を見つめるとカッと顔が紅くなり胸の鼓動が加速する。

デートの中で恋人とのキスも経験済みな彼女だが、純情故に何度やっても接吻は刺激が強かった。

しかし、ウブな恋人の恥ずかしそうな表情を見て発情したエロ乙女はこれだけでは物足りず、己の愛を一方的に彼女へぶつけた。
「まだ……足りませんわ……!」



「あお……んむっ!?」

朱音の頬に手を添えた青子が不意打ちでキスをする。

だが、それは朱音のような甘く初々しいものではなく淫らな雰囲気醸し出す色気あるオトナのキスだった。

「ちゅっ……れろっ、れろ……♡」

口付けの間から見える長い舌が朱音の口腔に侵入。生暖かい唾液を彼女の口に流し込む。

混ざり合う体液を勢いで押し流し朱音に飲ませると青子は再び唾液のカクテルを作った。

「あふ、んふう……ちゅ、ちゅっ……ゴク……っ♡ あ、青子お……♡」

無味無臭の唾から感じる甘酸っぱさと恋人の匂い。

口端からこぼれる体液の雫が制服のスカートに小さなシミを着ける。

愛欲に突き動かされた恋人からもたらされる快楽の波に溺れそうになったのか、朱音は青子の袖をぎゅっと握り締める。

それを朱音からも求めてきたと勘違いした青子も同じように彼女を自分の両腕の中に収めた。

「はむ……ちゅ、ちゅっ……ん、んんっ……♡」

「れろれろっ……ちゅっ♡ 朱音のお口、暖かくて気持ちいいですわ……♡」

飴玉を転がすように舌を動かし卑猥な水音の口腔に響かせる。それだけに飽き足らず青子は歯茎や頬の内側など朱音の口を隈なく犯し尽くした。

甘い痺れが全身に広がり、朱音はフレンチキスで少女の秘部から愛汁を漏らす。

（今日の青子、エッチ過ぎるよお……♡ こんなのもう普通にエッチしてるようなものじゃないっ……!）

火照った身体に恋人と熱々のキス。

体がチョコのように溶けていく感覚に浸り少女は目を閉じて恋人に身を委ねる。

（たまにはこういうのもイイかな……♡）

柔らかい舌に絡みつく子供っぽいペロ。慣れないキスに一生懸命な恋人を青子は可愛らしく思った。

接吻に夢中な朱音の息が荒くなる一方で彼女の身体から力が抜けていく。朱音を軽く引く張ると彼女の体はいとも簡単に青子の胸元に飛び込んだ。

淫らな一時に酔いしれる内に青子の理性が

徐々に崩れ始める。

いつもより一歩踏み込んだキスだけのつもりがそれ以上のことを求めるようになり、その先を想像する。

キュンっとな股が引き締まると青いショーツが蒸れていることに気づくと彼女は唇を離れた。

「ぶはっ……♡ もう、青子のエッチ……」

瞼を開け真っ赤になった顔でボツリと、しかし彼女に聞こえる声で呟く。

銀色の糸が垂れ青子の方に引き寄せられるが彼女はそんなことを気にする間もなく朱音のスカート裏に手を乗せた。

「ちよっ……!? 何するのっ!」

「んふふっ、わたくしに任せてくださいませ……♡」

ショーツの上で繊細な指をツーツと滑らせる。ムラムラが収まらない青子がスカートの中でまさぐるとオメコの先に溜まった湿り気が指についた。

「朱音も興奮していますのね……♡ わたくしと同じですわ!」

「だ、ダメだよ……! これ以上は……あうっ♡」

恋人の指がショーツの内側に侵入し愛液が蕩けだした乙女の穴に触れる。

「我慢は毒ですわ。それにここなら誰も見られることはないでしょうし、別に見られても構いませんわっ♡」

「だからって……私たちは風紀委員なんだよ。

んっ……生徒の見本にならないと……ああっ♡」

「……仕方ないですわね。まったく、朱音は考えが固いですわ」

不満そうに青子は恋人の下着から手を引っこ抜く。

発情した下半身と心は帰ってから一人で処理するとして、性に臆病ともいえる朱音のマジメさをどうしたものかと指についた粘り気を弄りながら思案した。

カーテンから出て乱れた制服を整える朱音。

やや怒り気味に彼女は恋人に注意する。

「と、とにかく白百合の生徒でいる内はエッチなことは禁止!」

「じゃあ転校すればさっきの続きが出来ますわね♡」

「そういうことじゃなくて……!」

いたずらに笑って冗談を言う恋人に頭を悩ま

せる朱音。

彼女のそういうところが可愛いと青子が眺めていると朱音は青子の肩を掴んで軽くキスをした。

「……今はこれで我慢して。卒業したら……好きにしていから……♡」

恥ずかしそうに上目遣いで言う朱音を見て青子はニンマリと頬を緩ませた。

「卒業が楽しみですわ。あと一年半でナニをするか、今のうちに考えておきませんか……♡」

「も、もう……っ! 青子の変態……!」

ポンッと青子の肩を叩き朱音は妄想するエロ乙女を無視して下校の準備を済ませる。

二人が茜色に染まった教室から出て行くと、誰もいなくなった教室にキンモクセイの残り香がほのかに漂った。

第二話 淫虐の罟

「もえもえきゅーんっ♡」

ケチャップがかかったオムライスにメイドが両手で作ったハートを笑顔で向ける。店員の対応に女子学生のカップルがキャッキャツと盛り上がっていた。

その様子を離れた席から冷めた目で眺める少女が一人。

(メイド喫茶というよりコスプレ喫茶ですわね……)

お尻をチラ見せる短いスカートの、胸を半分露出させた白いメイド服。あの衣装はこの近くにあったコスプレショップで購入したのだろうなど簡単に想像できる。

本物のお嬢様である青子は家にいる使用人たちの姿を思い浮かべながら注文した紅茶が来るのを待っていた。

(まあ店員の対応は悪くありませんし、学園祭みたいで楽しいですわ)

先月行われた学園祭でクラスの催しを担当した時のことを思い出す。

青子のクラスではメイドカフェが開かれ青子

もメイド服を着たのだが、普段もてなされる側であった彼女が逆にもてなす側を体験し新鮮な気持ちになったのは記憶に新しい。

そもそも青子がなぜ一人で歓楽街のメイド喫茶に来ているのか。

話は二時間前に遡る。

授業が終わり委員会も休みだったため青子は久しぶりにゆっくりできる放課後をどう過ごすかと考えていた。

朱音は幼い頃から交友のあるクラスメイトと下校したため、青子は一人暇を持て余していたのだ。

真っ直ぐ下校することも第一に考えたが、屋敷に帰ったところで同じ悩みをそこでするだけ。ならば今度のデートに備えて下見をしようということになり、ショッピングモールを散策したのが一時間前。

案外あっさりと終わったデートの下見。あとは家に帰るだけだったのだが、青子はショッピングモールを回っている間にあることを考えていた。それは先日のハロインナイトでの戦についてだ。

(あの時、やけに戦闘員が多かった気がします

わね……あの人数を短時間で洗脳したとしたらあまりにも効率が良すぎますわ……)

レポートで仲間を呼びよせていたとしてもあの数は多すぎる。もしかしたらあの戦闘員以外にも悪のシモベがいた可能性がある。だとしたらあの一带にダークヴァンドの手先が待機しているのかもしれない。

(まさかあの近くにダークヴァンドのアジトが……?)

そう思い調査に向かった青子はあの夜に赴いた風俗街で怪しい場所がないか探し回った。

しかしエロ乙女である彼女といえどまだ学生オトナの店に入るわけにもいかず、とはいえ外観だけでは何とも言えないのでひとまず学生でも入れる喫茶店で一息ついたのである。

(今日のところはこのくらいで勘弁してあげますわ。しかし、いずれ彼らの根城を暴いてみせますわ……!)

今はここで作戦を練るのが精一杯。

さっさと悪の組織を壊滅させて恋人と薔薇色の学園ライフを過ごしたい青子は今日のことを朱音に報告するついでにこの店を紹介しようと考えた。

委員会でこの辺に寄るなどと言った手前、デースポットにするのは難しいが正義のヒロインとして調査しに行くのであれば朱音も納得するだろう。

もちろん風俗街の調査はやるが、それ以上に朱音にエッチな雰囲気慣れてもらおうと青子は企んでいた。

（生真面目な朱音のことですもの……今のうちにエッチなムードを体験させておかないと本番の直前でへたれるに違いませんわ）

彼女にはまだ刺激が強いかもしれないが、その時は心を鬼にして同席させよう。露出度の高い店員相手に挙動不審になる彼女の様子を見るのも面白そうだ。

そう思うと次の週末が楽しみで仕方がない。青子は顔に出さないよう笑いをこらえるが彼女の唇はブルブルと震えていた。

水の入ったコップを嚙んで想像笑いを誤魔化している注文したお茶を運ばれて来た。

店員かと思いきり頭を下げた後、顔を上げて彼女に視線を向ける。だが、二十代半ばにも見えるその女性はメイド服を着ておらずラフな私服を身に纏っていた。

「前の椅子に座ってもいいかしら？」

「ええ、構いませんが……」

他のテーブルにも座れる場所があり仕方なく相席というわけではなさそうだ。

変わった店員だなとは思いつつ青子は水と紅茶を自分の手前に吹き寄せテーブルの半分を彼女のために空ける。

その後は何事もなかったようにお茶にミルクを入れて口を含む。喉の奥を通り後味を確かめると可もなく不可もなくまずまずの味だった。

チラリと正面の女性に目を向ける。

はだけた服の色っぽい彼女は青子を見ながら微笑んでいた。

「あの……何か……？」

「あなた、綺麗な顔してるわね。お肌もスベスベみたいだし、周りから美人って言われない？」

「いえ、特には。褒めたところで何も出ませんわよ」

青子は知らないが学園で彼女の容姿を称える声は圧倒的に多く、白百合美人トップスリーの名は学園中に浸透している。

だが、そのことが耳に入っていない青子は古典的なナンバかと思ひ女性を用心し疑いの目を

向けた。

「わたくしに用があるからそこに座っているのではありませんの？」

その問いに答える前に女性は名刺を取り出して青子に差し出す。そこには彼女がこの店の店長であると書かれていた。

「あなた、ここでバイトしてみない？ その美貌ならこの店でナンバーワンになれるかもしれないわよ」

「バイト、ですか……？」

「ええ。今バイトを募集しててね、あなたのような可愛くて綺麗な子を探してるのよ」

令嬢にメイドをやれと言うのはおかしい話だが、そのスカウトを青子は悪くないと思った。

学園祭で経験していることも一理あるが、それ以上に敵地に入り込めることが大きかった。

ダークヴァンドのアジトがある可能性が考えられるこの一帯。この店は無関係かもしれないがアルバイトというテイで近づけば、スターブルに変身することなく調べることができる。

スターガールズとして探れば敵にこちらの行動を悟られるリスクを避けられないが、ただのアルバイト君島青子であれば疑われにくい。

（いざとなれば道に迷ったと言って誤魔化せば何とかありそうですわね）

この嘘を通じるかは微妙だが一ヶ月くらいなら新入りであることを活かした言い訳が使える。手詰まりに思えた調査に一筋の光が差し込み、希望を感じた青子は店長からのスカウトにこう答えた。

「アルバイトは校則で禁止されています。ですので申し訳ありませんがこの話はなかったことにして頂きますわ」

あれらのメリットはダークヴァンドのアジトが近くにある点が前提だ。それが崩れた場合収獲なしに校則破りのリスクだけを負うことになる。

また、仮にアジトがあつたとしても、考え過ぎかもしれないが、この店もダークヴァンドの息がかかっている可能性はないと言い切れない。最悪の場合、敵の術中にハマリ朱音の足を引っ張ってしまうことを考えればこの店も警戒しなければならぬのだ。

目まぐるしく変わる青子の思惑などつゆ知らず、店長は真面目な娘だなと思うだけでこれ以上強く勧めることはなかった。

「残念。逸材を見つけたと思ったのになあ……」
「わたくしより適任な方はそこら中にいますわよ」

「でもこの街にいる学生はみいーんな白百合の生徒じゃない。だからあなたみたいに校則を理由に断る子が多いのよねえ……」

それもそうですわね、と返し青子がお茶の続きをしようとする。それを遮るように店長が彼女に顔を近づけ小声で話しかけた。

「実はもう一つ、大事なお話があるのよ」

「まだ何かありますの？」

「ごめんなさいね。でね、話っているのは……」
コソコソ話で妙だなと思いつつ青子はティークップを置いて耳を傾ける。

店長も周囲に聞かれないか左右に首を振り、大丈夫か確認してから口を開いた。

「女の子同士のエッチに興味はある？」

「え、ええ……まあ、人並みには……」

目をぱちくりとさせ恥ずかしそうに青子は肯定する。

人になんてことを聞いてくるのかと驚きながらも嘘を吐かなかつたのは彼女も真正の清純ではなかったといったところか。

彼女の回答にニンマリとする店長は胸ポケットから一通の封筒を取り出す。

青子はすぐにそれが怪しいバイトの紹介状だなと勘づき断ろうとした。が、封筒を開けるスタンブの紋様を見てとつさにそれを止めた。

（この印は……ダークヴァンドの……！）

琥珀色の型に描かれた幾何学的な模様は戦闘員の下腹部に刻まれた淫紋と酷似している。

それも偶然にしてはあまりにも似すぎているほどに。

「ねえ、ダークヴァンドって知ってる？」

「……っ！」

向こうからその名前を出され緊張が走り、青子は体を強張らせる。

自分がダークヴァンドに気づいたことを悟られてはいけない。物好きでない限り、ダークヴァンドの刻印を覚えている者はほとんどいない。知っているとすればそれは何度も戦って嫌でも覚えてしまったスターガールズくらいだ。

（わたくしがスターブルーだと知って……！）

いえ、そんなはずはありませんわ……単なる偶然、おそらくこちらが本命なのでしょう……）

スターガールズであると気づかれないよう慎

重に答えなければならぬ。逆に上手く話を誘導して彼らの手掛かりを掴むのだ。アジトの場所さえわかれば朱音と二人で一網打尽にできる。

額に滲む汗は青子の綺麗な長髪で隠れており、彼女の様子をジッ……と見つめる店長も青子の動揺に気づいた素振りを見せてはいない。

これを好機と見て青子は腹をくくった。

「えーっと、名前だけなら耳にしたことがありますわ」

「ふーん……名前だけなんだ。まあ、いいや。

詳しいことは後で教えてあげるとして……この店のオーナーがそのダークヴァンドのお偉いさんなのよ」

「ダークヴァンドのお偉いさん？」

幹部か、あるいはそれ以上の地位にいる者……。何にせよ悪の親玉の寝首を搔くにはうってつけのコネクションが突然舞い込み胸の鼓動が速くなる。

店長も悪の幹部だからか、自分をまあまあ偉いと付け加えて称したことも青子の心拍数を増加させていた。

「ダークヴァンドっていうのは怖い組織って思ってるかもしれないけど、そういうのは質の悪

いデマ。本当は女の子同士でエッチをして幸せになれるところなのよ」

「じゃあ卑猥な恰好してるのは……」

「あの子たちが望んで着ているからよ。彼女たちのエッチな欲望を解放してあげるのが私たちダークヴァンドの使命なの♡ とにかく私たちに興味があるなら、裏で詳しい話を聞かせてあげる」

青子はそれを了承しお茶を飲み干すと店長の後ろについていく。

客の何人かはその光景を見て真なる意味での『スカウト』だと気づき、歪んだ笑みを口元に表していた。

裏口に連れてこられた青子だが店長は歩みを止めず、彼女らはさらに奥の通路を進んでいた。

「どこまで連れていくつもりですか？」

「もうちょっと先よ。黙ってついてきなさい」

店裏にしてはホールから離れ過ぎている。どのように獲物を逃げられないところへ連れていきダークヴァンドの兵士に洗脳しているのかと青子は分析する。

（彼らの手口はおおよそ理解できましたわ。それにここまでの道のりも覚ええました。となれば

これ以上の深入りは危険ですわね……）

こちらの様子は相手に見えていない。

変身して奇襲するなら今だ。

青子は制服のボケットから緑色のクリスタルを取り握り締めて叫んだ。

「スターチェンジ、メタモルフォーゼ！」

聖なる光が青子を包み込む。

風紀委員会の腕章がついた制服が光の粒子となって消え、入れ替わるように青いコスチュームが彼女を包み込む。

長い黒髪も青く染まり、風紀委員長を一瞬にして正義のヒロインに変身させた。

「な、何っ……!？」

背後の眩い光に驚き店長が振り返るも彼女の目の前には鋭い剣先が向けられており、それ以上動くことはできなかった。

「両手を上げなさい。変なマネをすれば痛い目に遭いますわよ」

「あ、あなたは……スターブルー……ッ！」

大人しく正義のヒロインの言う通りにした店長。スターガールズがやって来るとは思わず、戦闘員に変身する首輪を外していたため彼女は武装することができなかった。

もつともそれを着けていたとしてもこの距離では彼女が変身するよりも早くスターブルーがレイピアで妨害しただろうが。

「この先にあなたの方のアジトがありますの？」

「そ、それは……」

「どうしましたの？ 早く言った方が身のためですわよ」

剣先を軽く揺らし敵を脅す。

戦況の主導権は完全にブルーが握っていた。

敵に同情することもある優しい朱音と違い、

青子は一切の容赦がなく勝利のためなら多少の汚いことをしたとしても心が痛まなかった。

「ええ、このまま真っ直ぐ進んで下に降りればあの方がいらっしゃるわ……」

「そうです。やはりこの先にヴァンドレディが……」

それさえわかれば長居は無用だ。

青子は剣を収めて数歩後ろに下がる。

だが、悪の幹部を見逃すつもりは毛頭なかった。

「もうあなたに用はありませんわ。このまま浄化して差し上げますわ！」

「んなっ……!? 正直に答えたのに……!」

「わたくしはスターレッドほど甘くありませんの。あなたの悪の心を綺麗さっぱり浄化し、あなたを真人間にして差し上げますわ」

人差し指に魔力を集中、爪の周りに小さな水流が渦を巻く。

「アクアトルネ……」

指先に力を籠め必殺技を放とうとした瞬間、

右半身から急に力が抜けよろけてしまう。手の痺れが全身に広まり膝立ちすらままならなくなり青子は体勢を崩してその場に倒れた。

（か、体が……動きませんわ……! なぜ、こんな急に……!）

この隙に店長が首輪を装着、戦闘員に変身する。さらに青子が歩いてきた道から黒ずくめのスレイブ兵が追って来て彼女を挟み撃ちにした。さっきまで圧倒的に有利な立ち位置にいたはずが、短時間で形勢逆転されピンチになる。

「うふふ、ようやく痺れ薬が効いてきたようね」

「痺れ薬……さっきの紅茶に……!」

「そう。勧誘を断られたから寝ている間に洗脳するつもりだったけれど、まさかあなたがスターブルーだったなんて。ラッキーだったわ」

思わぬ幸運に喜ぶ戦闘員はブルーの髪を掴ん

で敗者の面を拝む。悔しさと痺れ薬に苦悶する青子の表情を見て彼女は満面の笑みを浮かべた。「私をハメようなんて小賢しいマネを……でも、残念だったわね。この店の従業員は全員私の兵隊、スレイブ兵に洗脳済みなの。あなたに逃げ場はなわ」

「くっ……でも、わたくしがここで叫べば客の誰かがきつと……」

「声が届くわけじゃないでしょ？ ここは地下。それにお客さんに催眠を掛けてあるからあなたの声に気づくことはないわ」

立ち上がることもできず意識が遠のいていき、戦闘員の話が頭に入って来なくなる。

正義のヒロインがだんだん弱っていく様子を眺め、勝ちを確信する戦闘員はトドメを刺そうとする。

二本の指を近づけるとその間に電流が走りスタンガンのようなものができる。

「うっ……!」

避けることも叶わないブルーの首筋にビリビリっと電撃を与えると正義のヒロインはどうとう意識を失ってしまった。

「やった！ スターガールズの一人を倒せた

わ！ それもあの方のお氣に入りの方を……さ
っそくヴァンドレディ様に献上してご褒美をも
らわなくちゃっ♡」

兵隊たちにスターブルーを担がせ彼女たちは
アジトの奥底へと向かっていく。

正義のヒロインのあつけない敗北。しかし、
それこそがスターガールズ破滅への第一歩だっ
たのだ。

☆☆☆

「んんっ……ここは、一体……？」

肌を刺すような冷たい空気にそれに紛れた邪
悪な気配。得体の知れぬ何かに背筋をゾッとさ
せられた正義のヒロインが目覚ます。

ぼんやりとした視界の先に広がるのは巨大な
闇にも似た薄暗い無機質な灰色の部屋だった。

吊るされた腕を引っ張ると天井に続く鎖がガ
シャンつと音を立てる。彼女の手首に巻かれた
鋼の錠は並の力で引きちぎれそうにない。

「そうですわ……！ わたくし、ダークヴァン
ドの罠にかかって……どうやら捕まってしまっ
たようですわね……」

鮮明になり始めた意識で気絶前の記憶を思い
出す。現状を把握した青子だったがそれほど恐
怖や危機感はなかった。

変身状態が解けていないところをみるにスタ
ーガールズの力はまだ残っているようだ。この
拘束さえ何とかできれば脱出できる。

これからどうしようか彼女が思案していると
暗がりから女の声が響いた。

「お目覚めのようね。ごきげんよう、スターブ
ルー」

「あなたは……ヴァンドレディ……っ！」

部下を数名引き連れて現れた悪の女王にキッ
と睨みを利かせる青子にヴァンドレディは勝者
の笑みを浮かべた。

「囚われの身になった気分はどうかしら？」

「最悪ですわ。わたくしをもてなしたいのなら
もう少しマシな造りを勧めますわよ」

「うふふ、この状況でも落ち着いていられるな
んて。なかなかのしたたかさを持っているよう
ね」

お互いに相手の手の内を探り合う正義と悪。
特に青子は己の弱さを見せた瞬間、敵の猛攻
が我が身に降り注ぐことが火を見るよりも明ら

かで、なおさら余裕を崩すわけにはいかなか
った。

「わたくしをどうするつもりですの……？」

「決まっているわ。あなたも私のシモベに洗脳
するのよ。スターブルーの力を持った戦闘員が
いればあの小娘を倒すことも容易いでしょうね」

「わたくしとレッドを戦わせるつもりですの！
そうはいきませんわ。ここから脱してレッドと
一緒にあなた方を一網打尽にしてみせますわ！」

そう意気込む青子だったがヴァンドレディの
力で作られた特殊な鎖を壊すことができずにジ
ヤラジャラと鳴らすばかり。傲慢の剣技もこの
状態では披露の仕様がなく、青子はレッドのよ
うなパワータイプの戦士でないことを悔やんだ。
しかし、ヴァンドレディはその点を抜きにし
ても彼女を逃がさない自信があった。

「ここは風俗街の真下、あなたが捕まったとこ
ろのずっと地下にあるの。仮にあなたがその鎖
を破壊したとしても、私の可愛いシモベちゃん
たちを相手にしながら複雑な構造のアジトから
出ていくことは不可能よ」

「くっ……逃亡も想定済み、ということですか
……」

ダークヴァンドが現れる際、紫のゲートから出てくるのは店と組織の関係を見られないようにするためでもある。

来る者拒まず去る者は逃がさない、悪の支配者の考えを体現した造りに足を運んだ時点で彼女の術中にハマっていたのだ。

ただの変態痴女だと思っていた悪のリーダーの用意周到さに青子は眉をひそめる。

(どうやら朱音が来るまで洗脳に耐える他ないようですね……)

戦闘員たちは欲望を種に闇の変貌を遂げている。逆に言えば己の欲望を悟られない限り洗脳は成功しない。

どんな手で来るかはわからないが青子は相棒の助けを待っている間少しでも時間を稼ぐことにした。

「そもそもあなたの目的は何なのですか？」

「んふふっ、急にどうしたの。時間稼ぎかしら？」

「……っ！ 思ったより頭が回りますのね。色欲だけかと思っていましたわ」

「これでもこの子たち全員の面倒を見てるリーダーよ。エッチなことばかり考えているわけじゃないの」

得意げにヴァンドレディが答える。

スターブルーは相手に対する認識が甘かったと考えを改めざるを得なかった。

唇を閉じ身構える青子の顔を悪の女王がジッと見つめる。

「ふーん……」

「何なのですか……？」

青子の顎を掴みクイッと持ち上げる。ヒロインの顔を見定めるように眺めヴァンドレディがボツリと呟く。

「可愛い顔してるわね……んっ♡」

「んんっ……!? むふっ、ンン~~~~ッ！」

不意打ちのキスに驚くスターブルー。

想い人だけと決めていた接吻。

それも相手は倒すべき悪の親玉である故、彼女は嫌悪感を隠せずにはいられなかった。

拒否しようと首を振ろうとするもヴァンドレディの指先に顔をしっかりと固定され逃れることができない。

とがでない。

重なる唇の間に見える赤い舌が青子の閉じた口に侵入しようと押し付ける。

生暖かいペロの感触に気づき、性知識の多い青子は敵の意図を悟った。

(まさか……これ以上はいけませんわ……っ！)

(今更気づいても遅いわ。そおれ……♡)

ヒロインの瞳に焦りの色が見えヴァンドレディは好機とみるや青子の顔を寄せ彼女の口に舌をねじ込む。

ねっとりとした赤い突起物が少女の口内をぐるっと一周。己の体液で彼女の歯茎を濡らし舌で撫でる。

「んれろお……♡ ジュルっ、れろれろれろ……♡」

(き、気持ち悪い……!! こんなキス嫌ですねあ……!!)

不快感を伴う刺激を与えられると同時に青子は強引なキスに息苦しくなる。

そんな彼女の辛さを見透かすようにヴァンドレディが舌先を青子のそれに絡ませる。粘液がくっついては離れ官能的な水音を響かせた。

「ちゅっ……れろ、はふう……♡」

朱音との甘く気持ちのよいキスしか知らない彼女の口が強引なキス被虐の性感帯へと変えられていく。口内を舌に犯される感覚に支配され息が荒くなるも不思議と不快感が薄れていた。ヴァンドレディとの接吻は嘔吐にも等しいと

思っていたのに彼女のカリスマに惹かれるように青子は敵とのディープキスを受け入れ始める。心の奥底で気持ちいいと感じたところで急にヴァンドレディは密着していた唇を離し青子とのキスを止めた。

「ぶはあ……♡ ごちそうさま。あなたのお口、おいしかったわよ」

「ううっ……これで満足でしょう？ さっさとわたくしを解放なさい」

「いやよ。前々から狙っていたあなたを私のモノにするせっかくのチャンス……絶対に洗脳して私に媚びる牝にしてみせるわ♡」

ニツタリと口角を上げヒロインに宣言する悪の女王。青子は以前から彼女やその手下たちがスターブルーをヴァンドレディのお気に入りと呼んでいたことを思い出す。

彼女が自分を見る目には欲情した変態さを感じていたがそれは間違いではなかったようだ。

「それにしても随分発育のいいカラダね……♡ あなたと年の近い娘を何人も見てきたけどここまでエッチな体は見たことないわ」

豊満なエロボディに育った少女の肉体を厭らしい手つきで優しく撫でる。

青いコスチュームの間から見せる白い素肌。いつ見ても変わらぬ美しさを保つのに彼女がどれだけの努力を続けているのだろうか。

想像するだけでもその大変さが伝わる乙女の生身を女王はより自分好みに味付けにしようと画策する。

「スレイブ兵たち、アレを持ってきなさい」
パキンッと指を鳴らし部下に指示を出す。

しばらくして黒ずくめの兵士が二人、二本の大きな注射器を持って戻って来た。

「な、何ですのそれ……」

「うふふっ、あなたの体をもっとステキに改造するアイテムよ」

注射器の中には桃色にも近い紫の怪しげな液体が入っている。いわゆる、ナノマシンと呼ばれるモノだ。

博識な青子も実物を見たことがないため確証はなかったが、少なくともダークヴァンド製の危険な成分が含まれているに違いないと見抜いた。

（あれをわたくしの体に……きつとろくでもないモノに決まっていますわ……）

アンダーグラウンドで作られた未知の薬品に

青子は警戒心を強める。

だが、どれだけ身構えても彼女は囚われの身。正義のコスチュームを破こうとする悪の女王の手すら阻むことはできなかった。

「お注射するのにこの部分が邪魔ね。あとでとっておきの衣装を用意してあげるから……えいっ！」

「いやあああああああ……！」

ビリビリに破かれた白い布の繊維が宙に舞い、丸出しになった巨大な乳房が二つ、女王の前で揺れる。

肌色の良質な果実をツンツンと突きじくりと観察するヴァンドレディ。彼女の視線は二本のピンクの突起物に集中していた。

「だらしないおっぱいね。乳首もピンピンだわ」
「んひひひひひ……！」

黒いグローブに摘まれた乳首を手前に引っ張られ正義のヒロインが悲鳴を漏らす。

さっきまでの優しい愛撫ではなく今度は捕虜への調教として。気高き彼女からいじらしさを曝け出させるために乙女の乳房を弄る。

「降参するなら今のうちよ」

「冗談……言わないでくださいまし……！ わ

たくしは決して屈しませんわよ……！」

「いつまでその強がり可言えるかしらね、んふふ……スレイブ兵たち、そのふしだらなおっぱいにお注射しなさい！」

「ハッ！」

ヴァンドレディと入れ替わるように二人の兵隊が青子の前に立ち、鋭利な針を彼女の胸に向ける。

勃起した乳首にチクリと刺さり正義のヒロインが痛みを堪えた声を喉奥で鳴らすも、悪の劣兵は手を休めることはなかった。

「んぐっ……！ あ、あが……ッ！」

おっぱいの奥深くに刺しこみ怪しげな液体を注入、満タンだった容器の半分近くが青子の体内に取り込まれていく。

ドクドクとナノマシンを注がれたおっぱいが痺れ始め、青子は逆流する痛みを我慢しようと片目を閉じる。乳房が肥大化し、不自然な胸の成長から重苦しさに見舞われる。

注射器が空になる頃にはスイカ丸ごと一個分の重さが肩にのしかかった。

「お、重い……！ これで足元が見えませんか……！」

胸の膨らみもまさしくスイカそのもの。

「Jカップにまで膨張した爆乳はヴァンドレディが持つそれよりも大きかった。しかし驚くのはまだ早い。」

「よおーく見なさい……！」

「な、何ですの……？ んあっ！ ひ、ひいいいい……ッ！」

乳首の先端にヴァンドレディが指先を添え軽くそこを押す。一瞬、そこがへこむもすぐさま弾力に跳ね返され元に戻ろうとする。

それでも乳首を押し続けると……。

「あぐううう……！ こ、これは……っ！」

乳首が穴のように広がり女王の人差し指をちゅぽんと丸呑みする。その際に指とおっぱいの隙間から桃色の液体が噴出した。

「何ですの、これは……！ わたくしの胸から……お、おっぱいが……ッ！」

「さっきのナノマシンにはおっぱいを改造するだけじゃなくて母乳を出せるようにする成分が含まれていたの。それもただのおっぱいじゃなくて、飲んだ人間を母乳中毒にして私のシモベに洗脳することができるのよ」

「何ですって……!? なんてことを……早く元

に戻しなさいっ！」

「残念でした。一度体内に入ったら最後、体液と同化してその胸から洗脳母乳を出し続けるのだからあなたの体は二度と元には戻らないわ」

「そんな……！」

生涯をこんな淫らな肉体で過ごさなければならなくなるとそのショックは計り知れない。

何よりも、朱音とエッチしたいと思ってこの胸ではもう叶わなくなってしまった。

授乳プレイをすることは恋人をダークヴァンドのシモベに変えることに他ならない。もしかすると母乳だけでなくこの体そのものが交わった者を洗脳するようになっていたのかもしれないのだ。

想い人とのまぐわいを望む彼女にとって、もはや彼女との秘め事は不可能に近い。

淫らな欲望を叶えようとすることはダークヴァンドに屈することに繋がってしまうからだ。

気づかぬ内に変貌しつつある体質は青子にさらなる異変を与えていた。

「はあはあ……何だか、体が……熱くなってきましたわね……」

額から汗が滲み出し、体の火照りが抑えられ

なくなる。心の奥底から湧き上がる性的欲求。

脈動が速くなり比例するようにムラムラも増大する。恋人との接吻でもここまで興奮したことはなかった。ましてや敵対する女帝に欲情するなんてあり得ない。

しかし、自分の体に起きた異変は間違いなく性欲の類だった。

「媚薬が効いてきたようね」

「媚薬ですって……!?」

「今のあなたは洗脳母乳ができる体なのよ。当然それに含まれる媚薬も体内で生成されているわ。つまり、あなたは自分で作った催淫液で発情してるってわけ」

強制的に発情してしまう体質ももちろん一生涯続くだろう。

ただでさえ青子は元々性欲が強い。その何倍もの快楽を求めるようになり、それを抑えなければならなくなると彼女は気が狂ってしまいそうだった。

（朱音とのエッチもできずとオナニーだけで……そんなことできるわけが……しかし、それ以外の方法が思い浮かびませんわ……）

性衝動に理性を飲み込まれたら最後、今まで

倒してきた戦闘員たちにも劣らない破廉恥な姿を晒して町の皆に襲い掛かるに違いない。

そしてその毒牙は大事な恋人にも……。

青子はゾツとすると同時にスレイブ兵に洗脳された朱音を想像し、あろうことか興奮してしまった。

（いけませんわ、わたくしは朱音を守ると心に誓ったんですもの。朱音を洗脳するなんて……どんな命令にも応えるスレイブ兵になんて……そんなこと……ああッ♡）

じんわりとショーツに広がる愛液のシミ。

委員長以上に風紀に厳しい恋人が自分の性癖に眷族のごとく従順に付き合ってくれる。この先何カ月も待たなくても彼女との肉体の相性を確かめられる。

それが正義のヒロインとして間違っていない、青子は生唾を飲まずにはいられなかった。

（ふふ、思った通り正義のヒロインといえど年頃の小娘……性欲には逆らえないようね）

正義のヒロインの内側で高まる肉欲を見透かすヴァンドレディが青子の後ろに回り、スカートの下をまさぐり彼女の下着に手を入れる。

「何するんですのっ!?」

「おマンコ疼いて堪らないんでしょう？ スツキリさせてあげるわっ♡」

「け、結構ですわっ……!」

首を振って意思表示する青子。その顔は弱々しく敵の辱めと改造された乳房に間違いなく精神的ダメージを受けていた影響が表れていた。

心が擦り減るほど牝を洗脳しやすくなる。

それこそがヴァンドレディの狙いだった。

正義のヒロインが弱さを見せる時。

その時が彼女を洗脳するゴースインなのだ。

「遠慮する必要はないわ。未来のシモベの性欲を満たしてあげるのも主の役目だもの」

「誰が未来のシモベになるのです……んああッ!」

白いショーツの中に入れた手を伸ばし女の穴に近づける。濡れた女性器の先が黒いグローブに掠るだけでも発情して敏感になった膣口には十分刺激が強かった。

ラバーに包まれた指の腹でクリトリスの表面を軽く縦に撫でる。そこから陰核の周りをじれつたく撫で回し、最後に二本の指でクリを挟む。

「はうう……あああああ……ッ!」

クリトリスを摘まれた青子が体をビクンと

跳ねらせる。目を瞑って顔を天に向ける彼女の様子は正義のヒロインが、性感帯が弱点であると証明していた。

無論それだけで悪の女王が攻撃の手を緩めるはずはなく、さらなる刺激を与えようとそのまま指の間隔を狭めて陰核を押し潰す。

「ひぎいいいいいい……！」

「媚薬が回っているにしても感じ過ぎよ。さては毎日オナニーしてるわね？ それも一日何回も……やりすぎてくらくらに」

「そ、それはあ……あひいいいい……ッ！」

図星だと丸わりの絶叫を上げ、意識が敵への反抗心から逸れる。愛液がローションのごとく女性器とグロープを濡らし、手マンを次の段階に進ませる。

「オナニー狂いの変態ヒロインが正義を語るなんて百年早いよ！ どうせココも弄ってるんでしょ？」

中指を膣穴の入口に押し当て滑らかに挿入。

第一関節の手前で性器の筋肉が収縮し、一瞬指の動きを止められるもすぐに次の関節まで飲み込ませる。

膣穴の肉壁を押す一方で胸のお触りも忘れな

い。おっぱいイジメと手マンの同時責めで正義のヒロインを快楽の虜に貶める。

「この胸……まだまだ大きくし甲斐がありそうね」

「まだ手を加えるつもりですの……？」

「気が向いたらね……♡」

もはや奴隷のように好き勝手できる己の状況に青子は齒ぎしりをする。

しかしその行為がすぐに別の意味を持つようになった。

「はぎいいいいいい……♡ はう、ああ……」

「……いいいいいいんッ♡」

「ここがイイのね？」

「ち、違いま……んあああああああ……ッ♡」

女の弱点、Gスポットを見つけられ青子が悶絶。

軽いオーガズムに身を震わせる。

爆乳を弄る黒い手は乳首の穴をこねくり回す。

「ほら、見なさい。隙間から洗脳母乳が……それもさつきより濃いのが出てくるわよ。ナノマシンが馴染んで来たようね」

「ひっ、ひいいいい……ッ!？」

「媚薬も十分回ったようだし、そろそろおマンコの味を見ておきましょうか♡」

指を引っこ抜く瞬間の圧迫感から解放される感覚だけでも絶頂してしまう。

愛液を纏わりつかせた指を咥え獲物の味を確認。ジュル、ジュル……と蜜を吸る音。それからカツンッとハイヒールが後退の足音を共鳴させた。

背中に伝わる巨乳の重みがなくなり背後にあったヴァンドレディの存在感が薄くなる。

（次は何をするつもりですの……？）

手マン以外に女性器を味わうといえば……青子はクニグリスを思い浮かべる。

仮面の下に隠れた美形の顔で、長い舌をペロペロと動かし、牝穴を思う存分しゃぶりつくす。

街の平和を守る正義の味方にとって恐ろしい光景であるにも関わらず、青子は恐怖の身震いではなく次なる快感に期待していた。

心底ゾクゾクが止まらない青子だったが、ヴァンドレディは彼女の想像を絶するモノを用意した。

「んっ……？ 太腿に何か当たって……」

ヴァンドレディの腰を再び自分の尻に添えら

れるとさっきまでにはなかった別のナニかが骨盤に当たった。

抽象的な違和感が熱を持った棒状の物体と具体的に形を持ち始め、やがて乙女にとって天敵ともいえる恐るべきキノコ型のブツを連想させる。

「こ、この形……そんな、まさか……!?」

オンナであるヴァンドレディからそんなものが生えているとは考えにくい。だが、股間の真下にあるその物体は紛れもなくアレだ。

爆乳に隠れ股間の様子が見えなくともソレに対する本能的恐怖がそのシルエットを脳裏に克明に浮かび上がらせる。

ヴァンドレディが彼女の太股を掴み左足を持ち上げる。片足立ちさせられた青子のために戦闘員が用意する。

巨大な姿見には保健の教科書でしか見たことのないイチモツが映し出されていた。

女体についているはずのない肉棒に青子は怯えた声で持ち主に問う。

「お、おちんち……ひっ……!? 何でそんなものがあなたに……!」

「私の力の源、快楽と欲望のエネルギーで作

出したのよ。これで何匹もの牝の初めてをもらったわ。そして今度はあなたの処女を……」

赤々としたカリ首を見せつけるように反り返す。鏡に映るイキリ勃った巨根が乙女の穴を隠すように覆いかぶさる。

初めて見るマラの勃起は青子の知識を優に超えるエグさがあり、エスカレーター式の女子校に通うお嬢様にはそれがバケモノにしか見えなかった。

「そ、そのようなおぞましいモノを近づけないでくださいまし……っ!」

「怖がる必要はないわ。初めは誰だって緊張するけど、すぐに快楽が勝って楽になれるわよ。事実、そこにいるスレイブ兵もこれで気持ちよく洗脳してあげたもの」

ちらりと視線をその戦闘員に向けると彼女は悪の一味に迎えられた時のことを思い出し、涎を垂らして主の肉棒を眺めていた。

挿入されているわけでもないのに興奮する戦闘員は顔を真っ赤にしてオナニーをして性欲を発散する。ヴァンドレディが持つ魔性を体現したかのような凶悪なイチモツはそれほどまでにシモベを虜にする逸品だ。

そして、横目に見える彼女の痴態がここにいる正義のヒロインの末路にもなり得るだろう。そのために悪の女王は自分のマラをさらけ出したのである。

(これがわたくしのナカに……ゴクリ……)

牝の体を開発中の青子にとって敵の巨根は劇薬と大差がなく脳裏に深々と魅せられてしまう。

だが、凛々しく勃起するこの陰茎が自分の膣穴に入るとはとても思えなかった。

「き、拒否しますわ……!! そのようなケダモノがアソコに入るなんて考えられませんわ!」

「安心しなさい。私は女だからコレも女性器、オンナのおちんちなんだから!」

「そんなの詭弁ですわっ……!!」

牝穴を犯そうとフル勃起した女根が青子の下腹部にピタリとくっつく。熱々の肉棒が肉付きの良い腹に触れた瞬間、全身に電流が走り愛液を漏らした。

玩具とは比べ物にならない快楽がここに詰まっている。豪快な棒と繋がった途端、そこに込められた未知の世界が牝穴を舞台に繰り広げられるのだ。

「お喋りの時間は終わりよ。あなたの処女を私

に捧げなさいっ♡」

後ろから手を回し己の肉棒を挿んで位置を調整。ミラーを使つてしっかりと狙いを定め、腰をわずかに引くと女根の頭を膣穴の前にセットする。

性器同士が擦れ合い二人の愛液とカウパー汁がミックスされヌルヌルとした快楽が青子を襲った。

「ああッ……！ い、いいいいいいッ！ 嫌ですわっ……！ それだけ大きくては入りませんわっ！」

「無理やりでもねじ込んで入れてやるわ。そおらっ！」

「んあああああゝゝゝッ！」

言葉だけの拒絶しかできない、紙切れよりも薄っぺらな防衛反応がすぐさま快楽の喘ぎ声に変わる。

赤い亀頭を咥えただけでも快楽電流が弾け、青子は最低のヴァージン喪失に恐怖と享楽の涙を流した。

「おほおほおほおほおゝゝゝッ！」
もう片方の足も持ち上げ青子に開脚させる。
ゆっくりと彼女の腰を下ろし巨根の形に肉壁

を広げながら陰茎を奥深くまで咥え込ませる。

快感で彼女の四肢を痙攣させつつ性器がすべて隠れそうところで亀頭が何かに当たり、ヴァンドレディは肉竿による侵攻を止めた。

乙女の里で育ち、ガールフレンドと結婚するつもりでいた青子は知るよしもない。

処女を捧げるといふことの重さ。処女膜を破られるだけでも精神に多大なダメージを受け洗脳されてしまう者さえることを。

「痛かったら痛いつて言ってくださいね〜！」
看護婦が言いそうなことを気楽に言つてヴァンドレディはマラを正義のヒロインの子宮とキスをさせる。

交わる性器の間から真っ赤な雫が流れ出し、青子が痛みを込めた叫びを上げた。

「いあああああゝゝゝッ！」
信じられないほどの劇痛に正義のヒロインが肩を震わせる。

そんな彼女にヴァンドレディは口元を緩ませそのまま腰を青子の尻に打ち付けた。

「ごちそうさま♡ あなたのヴァージン、おいしかったわよ」

「ひっ……ひい……ッ！」

悪のシモベに視姦される孤軍奮闘の中、敵のリーダーに辱められ気高き青の戦士も流石にいつもの優雅さを保てなくなる。

恐怖が勝り足先を震わせる彼女だったが心のどこかでは自分よりも強大な存在に抱かれることに悦びを覚えていた。

（ヴァンドレディのおちんちんがわたくしのナカで暴れて……！ ああッ……！）

激しく上突きされ、己の尻にパンパンと女王の下半身が押し付けられる。蜜壺が女根を求め強く締め付け、ヒダを絡ませた肉壁で圧迫。大量に射精しろと肉棒に促す。

宿敵にもたらされた屈辱とは裏腹に青子の肉体は接待プレイのごとく相手の肉棒を愉しませていた。

「今にもイキそうつて顔してるわよ。我慢しなくていいんじゃない？」

「冗談……言わないでくださいまし……ンンっ！ この程度のオアソビ……玩具で十分慣れていますわ……あひいっ！」

「そうは見えないけど……いつまでその虚勢が続くかしら？」

正義のヒロインのやせ我慢を崩そうと腰を振

って肉棒を奥に咥えさせる。鏡を見れば恥辱の赤で顔を染めた青子の表情が映っていた。

「お、おマンコ……こんな女に犯されているの……あふう、いひいい……ッ！ 気持ちよくなってしまいますわあ！」

悪女に生ハメされて今にも快楽に負けそうな青子。肉欲に飲み込まれて洗脳されないよう彼女はここにはいない恋人を想い、正義の心を強く保つ。

「わたくしが洗脳されたら朱音までこのような辱めを……ここが正念場ですわ……！」

大事な想い人を守るため正義のヒロインは洗脳調教を耐え抜く決心を固める。その思いをヴァンドレディがいとも容易く挫こうと責めかかった。

「ここが弱いんでしょう？ それそれっ！」

「あああああ……ッ！ おマンコ、そんなに激しくないで……ッ！」

手マンで覚えられてしまったGスポットをデカマラに擦られ情けない喘ぎ声を上げる。

快楽を司る肉壁の性感を密集させた女壺の奥。牝の弱点を責められているにしてもどういいうわけか感じやすさが異常にアップしていた。

女根に密着し吸いつく肉腔で亀頭を摩擦。

股間に吐き出せ、吐き出せと望まぬ射精を悪の女王に懇願する。発情した獲物の期待に飼い主が応えないわけにはいかなかった。

「いいわあ……♡ 接待が上手ね。おかげでそろそろ出せそう♡」

「だ、出す……って、ダメっ……！ 汚らしいものを出さないで……ッ！」

「いやよっ♡ このままナカに洗脳ザーメン注いで支配される快楽をその体に刻み込んであげるわっ♡」

「いやあああああああ……ッ！」

肉棒をコントロールし前立腺を自ら刺激させ精子をググツと管に通す。

青子の肉体を操っているのかのように、子宮の口が女根の先を呑み白濁汁を受け入れる準備が整った。

「も、う……限界ですわ……ッ！ い、イクっ……！ おマンコイキますわあ……ッ♡」

快感がピークに達し射精するよりも早く正義のヒロインが絶頂。全身に快楽の波が流れ四肢を痺れさせる。

火照りと痙攣で体がどうにかなりそうだった

がこれで終わりではない。悪の女王はまだ満足していない。オーガズムを迎え全身性感帯となった肉体をヴァンドレディが蹂躪する。

「いったわね。私のふたなりちんぽでアクメしちゃったのねえ？」

「い、言わないでくださいまし……んひいいいいいいッ！」

「嘘はダメよ。いったのはわかってるんだから。敏感なマンコに特濃ザーメンぶちまけてやるわッ！」

「んあああああああああ……ッ！」

ビュルルルッ、ドクドクドク……ッ！

ブシャーアアアアアアアアアッ……！

肉竿に溜まった精子をここぞとばかりに牝穴へ大量放出。悪の女王にマーキングされた者を肉便器に変える白濁液で子宮を満たす。

入りきらなかった分は膣穴から溢れ出し肉棒の付け根に滴らせた。

「あっついのがあ……ッ！ 熱々の精子がわたくしのおマンコに注がれて……イクううううううっ！」

生ハメ中出しの気持ちよさを蜜壺が記憶。肉欲を満たしてくれる女根の形を覚えてしまう。

快感に浸っていることを悟られてはいけ
ない特別な魔力。それを凝縮させたモノを精子
と声を押し殺そうとする。

そこへヴァンドレディから横尻への平手打ち。
パチンツと乾いた音が鳴る。

「あざいいいいいいいいいい!!」

「素直になりなさい。こういう時は気持ちい
って言うのよ。ほら、言えっ!」

「き、気持ちいい……ッ! おマンコ気持ちい
いですわあ……ッ!」

射精された膣穴と愛のムチで叩かれる尻が同
時絶頂。正義のヒロインを変態のマゾ牝へと調
教していく。

「なんでこんなにイってしまいますのお……」

「それはね、あなたの体がイビルエナジーに浸
食されているからよ」

「イビルエナジー……?」

聞きなれない単語に疑問を抱くがオーガズム
に支配された青子の体が強張り上手く首をひね
らせられない。しかし、良からぬ雰囲気を変わ
せる言葉であることには変わりなく彼女は自分
の肉体に起こった異変の正体を警戒した。

「イビルエナジー……それは私の力の源で魔族
の中でもほんの一握りの者しか体内で生成でき

ない特別な魔力。それを凝縮させたモノを精子
に込めて出したのよ」

「そんな恐ろしいモノがわたくしの中に……そ
れよりも魔族ですって……!!」

「あら、言っただけでよかったかしら? 私、魔族な
のよ」

あれだけの力を持っているため只者ではない
と思っていたが、青子はヴァンドレディの正体
と魔族の存在に驚きを隠せなかった。

痴女めいたコスチュームや彼女のエロボディ
にばかり意識が向いて思いつかなかったが、自
分たちが住む世界以外、魔界があるのであれば
スターガールズでもないのに魔力を持った存在
が地球にいることに納得できる。

敵の正体を知れたのはいいがこれでは自分も
魔族か、少なくとも洗脳が完了すれば人間でい
られなくなってしまうことを暗に告げられたよ
うなものだ。

「イビルエナジーには洗脳効果もあるんだけど
……さすがはスターガールズ。一発だけじゃ洗
脳できなかったみたいね」

「あたり……まあです、わ……わたくしがそう
簡単に洗脳されて堪えるのですか……!!」

「でも自然とエッチな言葉が出るようになった
じゃない。言っておくけど私と交わっているだ
けでも体液を通してイビルエナジーが流れてい
るから、何もしなくても勝手にあなたは淫乱に
なっていくのよ」

「そ、そんなこと……わたくしがおマンコされ
て悦ぶおちゃんぽジャンキーになるはず……ハッ
!!」

「効果は十分出ているようね」

意識したわけでもないのに、卑猥な単語がス
レイブ兵のように自然にスラスラと口から出て
くる。ヴァンドレディが言ったのは青子を追い
詰めるためのハツタリではなかった。

気づかれることなく徐々に洗脳を進めること
ができたと確認したヴァンドレディは正義のヒ
ロインがより確実に悪のシモベにするために次
なる一手を繰り出す。

「そういえば……あなた、スターレッドとはデ
キているのかしら?」

「デキている、というの……」

「付き合っているのかって聞いているのよ」

「そ、それは……あなたには関係ありません
わ!」

答える義理はない、と言いたかったが歯切れの悪い言い方でヴァンドレディに察せられてしまう。

正義のヒロインが心理的に追い詰められているとわかり彼女はふふんつと鼻で笑った。

「付き合っているようね。楽しそうで羨ましいわ」

「わたくしたちの間にあなたが入る余地はありませんわよ……」

「それはどうかしら。洗脳すればあなたもあの娘より私を愛するようになるわ。それで……あの娘とはもうやったの？」

「んっ……!？」

性感帯を突かれながらの変態的な質問に青子は目を見開く。今の青子には痛い問いでもあり、後ろの女を見ようと顔を振り向かせ斜めに汗を飛ばした。

「あなたがコンビを組むようになってしばらくになるけど、付き合っているのなら当然エッチなことはしてるんでしょう？」

「何をおかしなことを言っているんですの……! わたくしたちは綺麗な交際、汚らわしいことはしないと約束していますのよ」

都合の悪いことを伏せて青子が堂々と答える。だが、痴女を束ねる女王にはそれもお見通しだった。

「ふーん……でも、エッチができなくて不満があるんじゃないの？ あのおお子ちゃまヒロインのことだし、大人になるまでエッチは禁止とか言われてるんでしょう？」

「そ、それはあ……はひいっ！」

どうなのよ、とまるで図星を突くように亀頭の手で子宮をつつく。痛いところを突かれはぐらかすこともかなわない正義のヒロインにヴァンドレディが畳み掛ける。

「私のシモベになればあの娘とエッチし放題よ」

「あか……レッドとエッチし放題……?」

魅力的な提案に青子の心が揺さぶられる。

甘い誘惑に耳を傾けたのならもう一押し。

正義の心にできた隙を見逃さずピストンの動きを一層激しくし、持ち前のデカマラで子宮を押し潰す。

「いひいひいひいっ！」

「正義の味方なんて辞めて私たちと淫らで愉しい時を過ごしましょう♡」

「わ、わたくしは……わたくしはあ……!」

「抵抗しても無駄よ。スターブルーは今日でお願い。私の手で終わらせてあげるわっ！」

陰茎の裏筋で牝穴の肉壁をゴリゴリと擦り性感帯を刺激。

逞しい肉棒を女の蜜壺に密着させ、牝の味を楽しみながら正義のヒロイン自らが快楽を貪るよう誘導させる。

「ここを責められるのがイイんでしょう？ ほらほらっ！」

「い、いいい……ッ! そこっ、だめええええ……! お、おマンコ、また……イクうううううっ！」

ビクンつと体を跳ねらせ全身の肌を震わせる。肉付きの良い太腿を持ち上げられ無様な格好で陵辱される様を悪のシモベたちが視姦。淫らな笑みを浮かべて正義のヒロインが我らの仲間に取り込まれるのを待っていた。

（わ、わたくしの弱いところを的確に突いて……ッ! 朱音とはキスしかしていませんのに、こんなに気持ちよく……!）

正直に言えば、恋人との甘い接吻よりコッチの方が断然気持ちいい。朱音を思っ指や玩具でオナニーしかできない平和な夜と比べてこ

では手マンもクリ弄りもレベルが違う。

エッチすらしてくれない地上での暮らしが嘘のようにアングラの女王が蜜壺を快楽で満たしてくれる。

（朱音はこんなに気持ちいいこと、一度もしてくれませんでしたわ。でも、朱音とこういうことができたら……うっ、ああッ……！）

下腹部に急激な熱を感じとつさに鏡に映った自分を見る。邪悪な力と交わり続けた影響かコスチュームがところどころ溶け出しており、酸性雨を浴びた傘のように衣装に穴が空いていた。

その隙間から覗かせるお腹周りに見える黒い幾何学模様。魔法陣のごとく描かれた紋章に青子は既視感を覚える。スレイブ兵の腹に視線を注目させると自分と同じものが見えた。

「淫紋が浮かび上がったようね。あなた自身が洗脳を受け入れ始めて洗脳が最終段階に入ったのよ」

「そ、そんな……わたくしが洗脳されたいなんて……」

「黙りなさい！ あなたは私のシモベになりたいと思っっているの。洗脳されて淫らな本性を晒したいと望んでいるのよ！」

反論も抵抗も許さずびしゃりと。

ヴァンドレディに遮られ青子は口を閉じる。

「それにそんなボディであの娘とエッチするっていうの？」

「あッ……」

「洗脳母乳？ それともおマンコ汁？ 今のあなたはキスだけでも交わった者を洗脳するスレイブ製造マシーンなのよ。いくらスターレッドといえど無事ではられないわ。一生恋人とエッチせずにいるつもり？」

「そ、それはあ……」

聖なる力を宿した布を色欲液で濡らす爆乳。自分を犯す女根をフル勃起させるマン汁。接吻という名の洗脳ディーブキス。

この体ではもう彼女の傍にはいられない。そもそも朱音はこんな淫乱ボディとなった自分を受け入れてくれるのだろうか。

学び舎での生活をもう半分を送れば解禁されるはずだった恋人との楽しいひと時。正義のヒロインでいる限りそれが訪れることは永遠にない。永遠に……だ。そう思った時、我慢していた欲望のダムに強烈なヒビが入る。

（学園を卒業しても……朱音とエッチできない

……？ そんなの……嫌ですわっ……！）

正義の天秤が快楽と愛欲に傾き、青き戦士にあつてはならない選択肢を強く突きつける。

決壊しかける理性の砦を破壊すべくヴァンドレディが命令口調で誘導する。

「なら私の仲間になりなさい。ダークヴァンドの手下として私のために働き、スターレッドも淫らなシモベに洗脳するのよ！」

「わたくしがレッドとエッチして洗脳を……？」
「そうよ。イビルエナジーに乗っ取られたスターガールズの力を使いスターレッドを倒すの。そして二人揃ってこの私に尽くすのよ！」

この甘言に乗ってはいけない。そう訴える本能を肉欲でかき消し正義のヒロインを悪の道へ引きずり込む。

「う、ううっ……レッドとエッチできる……でも、いけませんわ……！ やはりレッドを裏切るなんてわたくしには……ああッ！」

正気に返ったところを洗脳ファックによる上段突きで妨害。停滞も後退許さず墮落に向かつて思考を強引に前進させる。

「強情な娘ね。でも、そんなあなたも洗脳されてシモベになれば私に従うようになるのよ」



ふたなりチンポに溜まったイビルエナジーはいつでも放出できる。あとはヴァンドレディの意思で発射するだけだ。

「イケっ！ 今度こそイビルエナジーを受けて洗脳されなさい！」

「い、いやあ……あなたのシモベになんてえ……」

「出すわよ！ 魔族の王に射精されて淫らなシモベに生まれ変わらなさいッ！」

ドビュルルルルッ！ ビュッビュッ！

ドビュドビュッ、プシャアアアアアアッ！

熱々のザーメンを洗脳エキスに乗せて正義のマンコに放射。何人もの人間を魔に堕としてきた邪悪な力をスターブルーの体内に注ぐ。

「んひひひひひひひひひひひッ！ イ

ビルエナジーがあああああああ……ッ！

わたくしのおマンコに……ヴァンドレディの中出し……ッ、あひひひひひひひひひひひッ

っ♡♡♡」

中出し絶頂で体をのけ反らせ天井の闇に向かってはしたなく喘ぎ声を響かせる。

「もう一発イクわよ。そらそらッ！」

「おほおほおほおほ……ッ！ ふたな

りチンポでイってしまいますわあああああああああ……ッ！」

この女根には勝てない。

今まで互角の戦いをしていたと思っていたのは勘違いだった。朱音なしのタイマンで挑めば

自分は強大な魔王に歯向かう哀れな虫けら同然。魔力の質も量も桁違いで、その気になればヴァンドレディは初戦でこの結果をもたらしていたに違いない。彼女と繰り広げてきた今までの戦いがお気に入り

に会うためのただのお遊びだったと悟り口に出さずとも悪の女王に屈服する。魔に屈した心身をイビルエナジーが一気に浸食。刻まれた淫紋を赤黒く光らせ、そして……

（あ、あ……この感覚は……！）

ジュワアアアアアアアアッ……！

邪悪な魔力に侵された肉体の内側からイビルエナジーが黒い霧となって表面化。正義のヒロインを暗黒のベールで包み込む。

正義のコスチュームを跡形もなく消し去り、霧を黒い粒子に変換。邪悪な光を放しながら悪のシモベに相応しい衣装に仕立て直す。

首から鼠径部までびっちりフィットする黒いレオタードにムッチリとした四肢を覆うラバ

ースーツ。正体を隠すバイザーを目元に装着。

悪の強化スーツを身に纏い、闇のシモベが胎動する黒い霧の中から洗脳されたヒロインが姿を現した。

黒く染まった青子の体から肉棒を引き抜き彼女の下半身から手を離す。両手を縛る錠が外れ自由の身になった青子の背中がヴァンドレディにもたれかかった。

「洗脳完了よ。気分はどうかしら？」

「……………」

肉欲に果て意識を朦朧とさせる元正義のヒロインは唇をわずかに開き、涎を垂らしたまま何も答えない。ヴァンドレディは黙ったままの新たなシモベに抱きつく

と彼女の耳元で囁いた。

「私の言葉を聞きなさい」

「……………」

主の言葉に体をビクッとさせる新人戦闘員。優しく語るヴァンドレディの囁き声が耳に染み渡り心地よく何度でも聞いていたかった。

「私があなたのご主人様よ。挨拶しなさい」

「はい……」

自分を抱きしめる腕が緩みホールの隙間でぐるりと体を半周。ヴァンドレディの前で悪の

シモベは誓いの言葉を捧げる。

「わたくしはダークヴァンドの戦闘員……ヴァンドレディ様に忠誠を誓い、ダークヴァンドにこの身をお捧げ致します……んああっ♡」

自分が主のモノであると自覚した途端、イビルエナジーに植え付けられたヴァンドレディへの愛が戦闘員のリビドーを刺激する。

頬を赤く染め恍惚とした表情を浮かべる戦闘員に飼い主は新たな名前を授けた。

「スターブルー、あなたは今日からスレイブブルーと名乗りなさい。上級戦闘員、スレイブブルー。それがあなたの名前よ」

「スレイブブルー……ああっ、何と素晴らしい響き……！ 誠に感謝いたしますわあ……♡」

「気に入ったようで何よりだわ。さてと、スレイブブルー……一つ質問するけど、ダークヴァンドの目的が何なの私に聞かせてちょうだい。私のシモベになったあなたならわかるはずよ」

「はい、ヴァンドレディ様あ……♡ ダークヴァンドは世界を淫らに染めて、この星にヴァンドレディ様の帝国を作るのが目的ですわあ♡」

「その通り。そのためにもっと人間たちを洗脳しなきゃいけなわね」

己のリビドーに理性を支配され痴女に生まれ変わった戦闘員たち。彼女らに襲われて同じシモベに洗脳されたスレイブ兵に地上にいる風俗街の従業員たち。ダークヴァンドの世界征服は日常のすぐそこにあった。

正義を辞めたヒロインもその一部に取り込まれ悪の手先として人間たちに襲い掛かる。

想像するだけでスレイブブルーは感情を高ぶらせ正義のヒロインだった時よりも強く使命感に燃えた。

「さっそくですけど、最初の任務をお願いするわ」

「ハッ、お任せください！」

「やる気があってよろしい。でも、その前に……」

ヴァンドレディが青子の頭に手を置いて力を籠める。体内に流れるイビルエナジーと酷似した力を感じるがそれも当然、ヴァンドレディの力の一端を彼女に注いでいるのだ。

「その力とあなたのエロポディがあれば誰でもろうともスレイブ兵に洗脳することが出来るわ。今まであなたが浄化して来た分をそれで補充して来なさい」

「かしこまりました。では、行って参ります！」

スレイブブルーが手を前にかざし、何もない空間に紫のゲートを開く。主に与えられたイビルエナジーは十分使いこなせているようだ。

人間界に向かうシモベの背中を眺めながらヴァンドレディは勝利の余韻に浸った。

（これでスターブルーは私のモノ……さーて、これからがお楽しみね♡）

手中に収めたお気に入りのヒロインの様子を魔法のスクリーンで見物する悪の女王。

可愛いシモベは最初の獲物に風紀委員の面々を選んだようで、学友を裏切ること躊躇いのない手下の忠誠心に彼女は微笑みをこぼした。

もちろん己の宿敵でシモベの元恋人、スターレッドの邪魔が入らぬように彼女は自ら囹を買って出る。

席を立ちスクリーンに映るシモベを見て一言。「さあ、イキなさい。スレイブブルー！ あなたの力で世界を淫らに染めるのよ！」

スレイブ兵を引き連れてヴァンドレディも人間界に足を運ぶ。誰もいなくなった悪のアジトで中継される穢された正義のヒロインの悪事。悪のヒロインによる暗躍の幕が開けた。

エピソード

スターブルーこと君島青子が悪の組織に捕まり調教を受けた翌日の放課後。委員会が使われるいつもの教室にて風紀委員の面々が一通のメールにより集められていた。

この場に居ないのは君島青子と法能朱音のみ。学年に関係なく彼女らを除いた全員が普通の教室の半分ほどの狭い部屋で呼び出した張本人が来るのを待っていた。

「君島先輩、何の用だろう……？」

「さあ、大事な話があるってメールに書いてあったけど……」

「詳しいことは集まってからとも書いてあったよ」

てつきり教室で待っていると思っていたが我々が委員長の間はどこにもなく、来るまで待とうと決めてから十分が経つと彼女はまだ現れない。

連絡役を残して今日のところはもう帰ろうかと話を進めていると少女の声が一つ、会話の中に挿し込まれた。

「おおよそ集まっているようですわね」

「……！ き、君島さん！ いつからいたんですか？」

振り向くと彼女らの後ろに今回のホストが立っていた。

扉が開く音を聞いた者は誰もおらず、急に現れた青子に一同は驚き彼女に視線を集める。

「びっくりしましたよ。驚かせないでください」

「ごめんあそばせ。それよりも、朱音が見当たりませんわね……」

「法能さんならあなたを探しに行くって帰ったわ」

「わたくしを？」

どうしてと一瞬思っても青子はすぐにああ、と言って自分を納得させる。委員会にメールを送った時、朱音からの不在着信が何件も溜まっていたことを思い出す。

毎晩寝る前にお休み電話をする恋人が一日だけとはいえず何も言わずに消えたのだ。一晩だけなら寝落ちだと思えるが、丸一日ともなれば朱音の正義感が彼女に虫の知らせを伝えてもおかしくない。

「朱音も……するつもりでしたけど、いない方が却って都合が良いかもしれませんわね。邪魔

される心配ありませんし……」

「え、何か言った？」

「いえ、ただの独り言ですわ」

「……？」

書記を務める同級生がわずかに青子への違和感を覚えるも具体的にそれが何なのかわからず青子のいつもの態度で有耶無耶になる。一方で他のメンバーは一斉に青子に質問を投げかけていた。

「みんな心配してたんだよ。朱音ちゃんなんか特に！」

「連絡もなしに休むなんて委員長にしては珍しいですね」

「家にも帰ってないってホント？ 屋敷の人が大騒ぎしてるって噂聞いたよ」

「昨夜から今まで何していたんですか？」

当然の疑問を次々にぶつける風紀委員たち。

しかし当の本人はどこか面倒くさそうに話を受け流し打ち切るようにぴしやりと言った。

「ご心配をかけましたわね。もう大丈夫ですわ」

「で、でも……」

「ちょっとした反抗期、ですわ……」

青子の言葉に圧を感じ書記はこれ以上の追求

ができなくなる。彼女への疑問は未だ晴れないが、諦めて今回の本題に話の舵を切った。

「それで、大事な話っていうのは何？ 緊急招集なんて柄にもない言葉まで使って呼んだんだから相当なことなの？」

「ああ、そのことですか……実はですね、近々風紀委員会を改革しようと思いますの」

「『改革う……！？』」

保守的な委員長の口から物々しい単語が出ると思わず風紀委員の面々が一斉にざわつく。

ましてや風紀委員会に改革という似合わない言葉が合わさり彼女らは動揺を隠せなかった。

「こういうことなの……？ それに年間計画をこの間提出したばかりじゃない」

「あんなものはただの紙切れ。従う必要はありませんわ。それに代案ならもう考えてありますの」

「そ、そうなの……？ 具体的には何をするつもり？」

「それは……」

直後、青子は口を閉じ言葉を紡ぐのを止める。代案があると言い切ったにも関わらず急に話を打ち切るなど明らかに不自然だ。

「どうしたの？ 君島さん？」

「……………」

「なんで答えないの？ ……ってあれ、あなた……その……関係ない話をするけれど、胸が大きくなってない？」

そういえば、と他の生徒も書記の気づきに同意する。元々巨乳だった青子だが、言われてみれば彼女の胸が数カップもバストアップしている。制服の胸部も昨日と比べて異様に張り詰めているではないか。

「いいんちよーのおっぱいスゴっ……！」

「豊胸でもしたんですかー？」

青子の異変を呑気に受け入れる後輩たちとは違い、同年代の生徒たちは青子が豊胸するなど信じられないと彼女の爆乳を凝視していた。

それに家出と無断欠席の件もあり彼女らしくない行動の数々から青子が別人のように思えた。「どうして何も答えないの！」

「……………」

俯き無言を貫く青子に書記は苛立ちを見せる。

溜息を吐く彼女は心を落ち着かせようと深呼吸し、ふと目線を下ろすと委員長の足元に小さな水滴が点々とできていることに気づく。

床に散らばる雫がさらに増え少し目先の角度を上げるとスカートの下から滴る雨と太股に垂れる透明な汁が見えた。

「ちよっと、君島さん……？ あなた、本当に大丈夫？ 何だか熱っぽいわよ」

真っ赤な顔と小刻みに震える肩。

はあはあ……と青子唇から熱い吐息が漏れる。昨晩家に帰らなかったせいで風邪を引いたのではと他の生徒たちも彼女を心配し青子の周りを囲う。

「風紀委員を新しく……はあ……はあ……あの方のためにも……わたくしは……わたくしはあ……♡」

「君島さん、酷くうなされてるわ……誰か、保健室に行って先生を呼んできて！」

「う、うん！ えっ……？」

慌てて教室から飛び出そうとする少女の手を青子が掴んで足止めする。彼女の手首を持った青子だが、それっきりビタリとも動かずまるで他人を呼ばれたら困ると言いたげだった。

固まった青子の頭に女王の声が反響する。

『今よ、変身してあなたの本当の姿をその子たちに見せつけなさい！』



ヴァンドレディに支配された彼女の脳にテレパシーを送るなど造作もなく、青子は主の言葉にすんなりと従った。

「はい、かしこまりました。ヴァンドレディ様……」

足止めた少女の手を離し、その手で青子は自分の首元に手を添える。透明になっていた黒い首輪が姿を現し首輪のランプを紫色に点灯させる。

「スレイブチェンジ……♡ あッ、あひい……♡ んあああああああああああああああああああ♡♡♡」

喘ぎにも近い叫びを上げる青子の体を黒いエナジーが包み込む。制服と下着を溶かし、どす黒い粒子が丸裸の胴体に付着。

四肢に纏わりつくラバースーツとともに長い黒髪を青く染め上げる。君島青子を悪の戦闘員に作り変えると不吉な光を放って彼女の生まれ変わった姿を披露した。

「はひひひひひひひひ……♡ スレイブブルー、覚醒完了お……♡ ヴァンドレディ様のシモベに変身するのは気持ちいいですわあ♡」
脇を見せつけるように両腕を首の後ろで組み

歪んだ笑みを作る青子。その様子を一部始終眺めていた風紀委員たちは同時に彼女がスターブルーであったことを悟る。

一同の前で邪悪な変身を遂げたせいで彼女の目元を隠すバイザーはほとんど意味をなしていなかった。

「き、君島さん……いいえ、スターブルーがダークヴァンドの戦闘員に……!」

「お初にお目にかかりますわ。わたくしはスレイブブルー、ダークヴァンドとヴァンドレディ様に仕える忠実なる牝のシモベですわ!」

スターブルーの肉体に装着された黒いびっちりスーツ。正義のヒロインだった頃のコスチュームは欠片も残っておらず、青い長髪だけが彼女の面影を見せている。

「ひ、ひいっ……!! 委員長がいなくなったのはダークヴァンドに洗脳されたからだだったんだ……!」

「その通りですわ。昨晚から今までわたくしはヴァンドレディ様のご寵愛を授かっていましたの。そして、新たな力も……」

青子が人差し指をスッ……と前に突き出し必殺技を出すように魔法の力を籠める。

「アクアバインド!」

指先から発射された水のリングが分裂し四方八方に拡散、少女たちに目がけて飛んでいく。

水とは思えない硬さの輪っかに縛られた彼女らは腕を動かすことができなくなった。

「解けない……!」

「何をするんですかつ!」

「無力な小娘の癖に小煩いですわね。あなたたちから洗脳してもいいんですよ」

「……っ!」

穏やかな青子から決して出るはずのないキツイ言葉使いに風紀委員たちは息を呑む。

彼女たちのざわつきも同時に収まり静かになると青子は風紀委員を一人ずつ見定め、一人の少女を指定した。

「まずはあなたからですわ!」

「ひい……っ!」

指差す先にいたのは風紀委員のナンバーズリィで、洗脳された委員長とここにいない副委員長を除いたこの場において実質リーダーでもある書記だった。

ダークヴァンドの戦闘員に狙われ怯える少女の後ろに回り、青子は頭を掴んで彼女の目の前

で人差し指を立てる。

「わたくしの指をよく見なさい……」

「あつ……」

黒いグローブの先がぼお……と妖しく光り、書記の視線を向けさせる。主からもらった魅了催眠の力で意識の自由を奪う。

頭から上半身、そのまま下半身を通って足先まで、不思議な力が体の感覚をおぼろげにさせる。体から力が抜けていくと少女は立っているのもやっとになった。

「う、あ……」

「そう、そのままわたくしに身を委ねなさい」
フラフラと体を揺らす少女がゆっくりと後ろに倒れ青子の腕に背中を預ける。ボーっとした無気力な表情で口端から唾液を垂らし書記は虚ろ目で天井を眺めた。

そんな彼女を片腕で抱き隣に立つ青子は書記の顔に唇を近づけふうーっと息を吹きかける。

「あッ、ああッ……♡」

青子の息吹を鼻から吸い込んだ書記が体をビクンッと跳ねらせる。グツと体を胸囲に引き寄せられると催淫ガスにも近い青子の体臭も漂ってきた。

委員長の甘い吐息とフェロモンが麻薬のように書記の理性を崩し乙女の肉体を火照らせる。

「あッ、あッ……♡ 君島さんっ……♡」

「んふふっ……おマンコが濡れて来ましたわね。どうかしたんですの？」

興奮気味に喘ぐイキ人形と化した書記に青子がいたずらっぽく問いかける。スカートの下に手を伸ばしショーツの先っぽを触れると生暖かい湿気が広がっていた。

「わかっていましてよ。以前からあなたがわたくしを学友としてではなく性的な目で見て接していたことを。わたくしのエッチな体が目当てだったのでしょうか？」

「そっ、それはあ……♡」

「隠さなくてもよろしくてよ。わたくしにはすべてお見通し。わたくしの目を欺くことは不可能ですわ」

書記が青子に好意を持っていたことは確かな事実だ。フルーツを詰め込んでいると言っても過言ではない二つの乳房に興味がないかと言われれば嘘になる。

だが、彼女が青子に性行為を求めようと思ったことは一度もない。朱音と付き合っていると

知った時も彼女は身を引こうと青子への想いを諦めようと時間をかけながらも試みている。

その微かに残っていた感情が掘り起こされ青子により過剰に歪められた。

「さあ、大人しく認めなさい。わたくしの淫らなボディを好きにしたいくて堪らないのでしょうか？ あなたはこのメロンのようなおっぱいに挟まりたくてしょうがないのですわ！」

「アッ、アッ……♡ そ、そうです……♡ 私には君島さんのことをエッチな目で見て……あなたのおっぱいを……あううっ……♡」

引き立てられた卑猥な気持ちが眠っていた想いを淫らな形に改変していく。

純粹な好意が性的な欲望へと変貌し、悪の心を植え付ける土壌が出来上がると青子は彼女の耳元で悪魔の囁きを始めた。

「わたくしの言うことに従えば気持ちよくなれますわ」

「君島さんの言うことを……？」

「ええ。わたくしがこれから言うことにあなたはすべて『はい』と答えるだけで幸せな気持ちに満たされますわ。いいですわね？」

「あッ……はあい……♡」

スレイブ兵になれて幸せえええええええええええええッ♡♡♡

「素敵な姿に生まれ変わったようですね。似合っていますわよ」

「はひいッ……♡ ありがとうございます
う……♡ 青子様……何なりとご命令を。あなたのシモベに命令してください……♡」

悪の戦闘員が従える兵隊に変貌した少女がガニ股になって愛液を垂らしながらマスターの命令を待つ。

一方、書記が洗脳される様を一部始終見せつけられていた風紀委員たちは動揺し部屋の隅で怯えていた。

「うふふつ、次は誰にしましょうか？」

「い、嫌あ……！ 誰か助けて！」

「私たちまで洗脳されちゃう！」

くると振り向く青子の視界に入った後輩たちが次のエモノが自分になると感じ、胴体を拘束されたまま教室から脱出しようとする。

もちろん青い悪のシモベはそれを許さず、出口の前に亜空間ゲートを開くと主から借り受けた兵隊をこの場に呼び寄せた。

「逃がしませんわよ。スレイブ兵たち、ここに

いる全員を捕らえなさい！」

瞬く間に捕獲されていく風紀委員たち。彼女らを床に組み伏せる兵隊の中には先ほど洗脳されたばかりの少女も混ざっていた。

青子は自分から逃れることはできないと見せしめのために、無意味な逃亡を図った後輩二人を兵隊に命じて連れて来させる。

「恐れる必要はありませんわ。あなた方も書記さんと同じように気持ちいい世界に浸りながら堕ちていくだけですの」

「委員長、止めてください！」

「先輩は……スターブルーはこんな悪いことする人じゃないです！」

「やかましいですね。黙りなさい、チャーム……！」

二人の眉間に指を突き出し青子が催眠の光を至近距離で放つ。

「う、あ……♡」

「力が……抜けて……」

大人しくなった後輩たちがうなだれるのを確認すると青子は戦闘用スーツの胸部だけを溶かし、たたわなおっぱいを露出させる。

ピンピンに勃った乳首から漏れる母乳。その

甘い香りにつられ催眠状態にある後輩たちが青子の爆乳に向かって首を伸ばした。

「さあ。可愛い後輩たち、わたくしの洗脳母乳でオツムをバブバブしましょうね……♡」

「ままあ……♡ んくっ……♡
「ちゅばちゅば……ゴクゴクっ♡ みるくおいちい……♡」

口の動きだけでおっぱいに吸いつき濃厚な洗脳ミルクを味わう。水の拘束具がただの液体となつて床に落ちると彼女たちは乳搾りの要領で直飲みし始めた。

「あおこままあ……♡ もっとみるくちょうらい……♡」

「ままのいうことなんでもきくからあ……♡」
二つの巨峰にしゃぶりつき後輩たちは自ら知能を赤ちゃんレベルに落とす。合わせて精神を邪悪な意思に対して無抵抗になるよう堕としていく。

ペロペロ、ちゅるちゅる……ゴクリっ。

母乳で腹を満たす裏では体液に混ざったイビルエナジーが彼女らの脳を侵食し、ダークヴァンドに都合のいい価値観に染められていった。
「ままのためにすれいぶへいになるのお♡」

「だーくうあんのしもべにうまれかわるう♡」

「あらあら、恥もなくすつかり蕩けて……だからしない子たちですわ。これではもう風紀委員など務まりませんわねえ……？」

自分たちが大きな赤ちゃんになってしまったことを認識できない後輩らに青子はニツタリと微笑む。

書記のように手からイビルエナジーを出すまでもなく、夢のような心地に沈んだ二人はミルクを堪能しながら黒いコスチュームを纏った青子専属の兵隊に変身した。

「へんしんきもちいい……♡」

「ままのためにがんばるのお……♡」

先輩戦闘員からの拘束も無くなり兵隊たちが本能的に母乳を求める。

短時間で学友が三人も洗脳されてしまい、残された風紀委員は自分たちが助からないことを悟りつつ、突然襲い掛かった理不尽に疑問をぶつけずにはいられなかった。

「どうしてこんなことをするのっ！ 君島さんの目的は何なのっ!?」

信じられない現実を前にして少女は強い口調で問いかける。

自分たちのリーダーが、街を守る正義のヒロ

インが。悪の心を植え付けられたのにはきつと何かやむを得ない理由があつて、そこに付け入られて洗脳されてしまったに違いないと。

聞いても無駄だとわかつていながらも正義のヒロインだった少女によるこの乱心に自分が巻き込まれた理由が欲しかったのだ。強引にでもいいから仕方がないと納得させられる理由が。

しかし、青子の口から語られたのは身勝手で、自分本位な欲望だった。

「朱音と学園でエッチするためですわ」

「……は？」

尊敬していた同級生がサラリとおかしなことを言う。

彼女に理解できたのは青子の恋人。

自分たちを束ねるもう一人のリーダーである副委員長が何か関係があるということだけで、それよりあとは何も頭に入って来なかった。

思考停止した風紀委員を置いてけぼりにし、青子は自らの目的を当然のように告げる。

「風紀委員会の改革、それすなわち裏風紀委員の設立ですわ。つきましては皆さんも学園の性処理係を担ってもらふつもりですわ」

「な、何を言っているの……？」

「学園でエッチができればそれだけイビルエナジーを浸透させやすくなりますし、わたくしも朱音とエッチができて一石二鳥。この学園の生徒も先生も気持ちよくなれてみんなハッピーですわっ♡」

青子の言い分を聞いて彼女は啞然とする。とてもじゃないが理解に及ぶ範囲を優に超えていた。エロ乙女であることを知らなかったというのもあるが、彼女は青子の気が狂ったとは思えなかった。悪のシモベが想い人とのセックスを想像して発情する姿を見て少女は混乱する。そんな彼女に当の本人は涼しげに同意を求めた。

「頭の良いあなたでしたらわたくしのこの思い、わかってくれますわよね？」

ニツコリと、イエス以外の答えを望まない同意に少女は拒否することも正気に戻れと訴えかけることもできず半ば強制的に首を縦に振ってしまう。

その瞬間、いつの間にか教室に充滿していたイビルエナジーが悪のシモベに屈した少女に集中狙いし、身も心もスレイブ兵へと作り変えた。

「ああっ……♡ 君島さんの言う通りにしていればそれでいいの……♡ 何にも考えずキモチイイことだけしていればそれで……♡」

「そう、わたくしの手となり足となり……あなただのすべてをわたくしが管理してさしあげますわ」

「んひひひ……♡ 青子様のお人形になれてしあわせ……♡」

青子が手を下さずともこの場にいる者は恐怖に屈した瞬間、悪のシモベに染められる。

そのことに気づいた勇気ある一人の生徒が、ここにはいないもう一人のヒロインにも負けず劣らずの威勢を張る。

「わ、私はダークヴァンドなんか屈しない！きつとスターレッドが助けに来てくれるから、それまでは決して……！」

「ふっ、ここまで見ていてそんな虚勢が張れるとは……仕方ありませんわね。他の皆さんの心を確実に折るためにも、わたくし自らが言ってもわからぬ愚か者をダークヴァンドの劣兵に仕立てて差し上げましょう。」

もしかするとスターガールズになれたかもしれない、強き心の持ち主に青子が詰め寄る。

「覚悟はいいですわね？」

「す、スターレッドが助けに……」

「彼女が来ることはありませんわ。ヴァンドレディ様が直々にお相手してくださっていますもの」

「そ、そんな……あ、ああっ……いやあああああああああああああッ！」

絶望する少女の額に青子はイビルエナジータの指先を当て彼女の頭に直に流し込む。

彼女の悲鳴を聞いた他の生徒たちも新たなスレイブ兵が誕生するとともに同様の姿へと変わっていく。叫び声が大人しくなり全員が黒ずくめの姿になると最初に洗脳された少女が洗脳された仲間たちを悦んで歓迎した。

「いひひひ……♡ みんな青子様のモノになれたあ……♡」

すべての少女が洗脳され、青子が一列に並ぶスレイブ兵を総攬する。頬を釣り上げ満悦した彼女は空間を歪め帰還用のゲートを開いた。

「任務完了ですわ。スレイブ兵の皆さん、新しい住処になるダークヴァンドのアジトに帰りますわよ」

「……かしこまりましたッ、スレイブブルー様

っ！」「」

次々と兵士たちが亜空間ゲートに入り、残るは青子一人になる。自分もアジトに戻ろうとゲートの前に立つと彼女は風紀委員長として座っていた席に目を向けた。

「ふふっ、これで風紀委員会が生まれ変わりますわ。ダークヴァンドの、そしてヴァンドレディ様のための委員会……楽しみですわね、朱音」
そう言って青子も教室から姿を消す。

数分後、ヴァンドレディとの戦いを終えて駆けつけた朱音が目撃したのは、ものけのけのになった教室と床に散らばる牝汁の数々。そして、微かに漂うイビルエナジীর残留だった。

「い、一体ここで何が起ったの……!? みんなは……!? 青子……あなたはどこに消えてしまったの……ッ！」

洗脳された正義のヒロインが数分前までここで暗躍していたことなどつゆ知らず、朱音の間いかけが虚しくこだまする。

悪のシモベに堕ちた青きヒロイン。
彼女への魔の洗脳調教はまだ終わっていない。

(Vol.2に続く)

あとかぎ

mio

悪堕ちで何が好きなんだろうと考えた結果
私は戦闘員化が一番刺さることに気づきました。
戦うヒロイン×びっちりスーツ×洗脳の組み合わせを
もっと見たいので皆さんも描いてください、お願いします。

というわけで、初めまして。mioと申します。
今回は数年前に書いた処女作をリポートし、
この作品を同人誌として発行させていただきました。
今回収録した内容はシリーズ全体のプロローグとなっており
次巻からが物語のメインストーリーになります。

支援サイトで先行連載した際、応援してくださった方々や
この度表紙と挿絵を描いていただいたわぶき先生、
そしてこのような稚作をお手にとってくださいました
皆様に心より感謝申し上げます。

それではまた次の作品でお会いできるのを楽しみにしております。

わぶき様

戦闘員化は人類文化の至宝です。

奥付

聖星天使スターガールズ
発行日：2022年1月16日
発行者：エムアイオー
連絡先：miojosou37@gmail.com
印刷所：株式会社 栄光